

第2章

日本青年中国派遣

行 動 地 図

行 動 記 録

訪 問 先 一 覧

団 長 報 告

参加青年代表報告

ディスカッション及び座談会の成果





行動記録 平成30年度 日本青年中国派遣

	月日	時間	行動日程	都市
1	10月23日 (火)	9:05 12:00 14:30 15:45-17:30 18:00-20:00	東京(羽田)発(NH961) 北京着 ホテル着 史家胡同博物館視察 ・日程説明会 ・史家胡同博物館コミュニティ・ユース・クラブのボランティアと交流 ・太極拳文化講座と体験 呂偉中華全国青年連合会副秘書長主催日本訪問団既参加青年との交流夕食会	東京 北京
2	10月24日 (水)	9:00-10:00 10:00-12:00 12:30 14:50-17:00 19:00-20:50	李柯勇中華全国青年連合会副主席表敬訪問 張季風中国社会科学院日本研究所副所長による講座 テーマ『「十九大」と中国における経済社会総合発展及び展望』 昼食 Kr Space視察 ・日中青年による起業に関する交流会 伍偉中華全国青年連合会副秘書長主催歓迎会	
3	10月25日 (木)	10:00-12:00 12:30 13:50-19:00	中国人民抗日戦争記念館視察 昼食 北京第二外国語学院訪問 日中平和友好条約締結40周年記念フォーラム一日中青年友好フォーラム ・団長挨拶 ・北京第二外国語学院教師代表によるスピーチ ・日中両国青年によるスピーチ ・グループディスカッション ・キャンパスツアー(グループ別) ・大学構内学生食堂にて学生との夕食交流	
4	10月26日 (金)	9:00-10:45 11:25-12:00 12:00-14:00 14:40 17:15 19:25	故宮博物院視察 在中華人民共和国日本国大使館表敬訪問 ・最近の日中関係と中国情勢について講義 ・質疑応答 中国国際青年交流センターにて中国食文化体験(餃子作り) 北京首都国際空港着 北京首都国際空港発(CA1235) 西安咸陽国際空港着	↓ 西安
5	10月27日 (土)	9:10-11:10 11:50 13:40-15:40 16:30	秦始皇帝陵博物院(兵馬俑)視察 昼食 西安国際港務区規画館視察 ・中西部陸港金融小鎮視察 ・西安港中欧班列運営センター視察 ・西安鉄路コンテナセンター視察(バス車内) 西安外国語大学訪問 ・ホームステイマッチング ・日中青年座談会 各家庭へ移動、以後ホームステイ	
6	10月28日 (日)	14:00 20:20 21:15	西安外国語大学集合 ホームステイ懇談会 ・日中青年によるホームステイ所感の発表 ・団長挨拶 ・中国伝統文化講座「秦腔(地方劇)」講義と体験 ・陝西省青年合唱団による合唱披露 ・大学構内学生食堂にて学生との夕食交流 西安北駅発(高速鉄道) 宝鶏到着	↓ 宝鶏

	月日	時間	行動日程	都市
7	10月29日 (月)	9:00-11:45 12:00 14:00-15:30 15:45-17:30 17:50 18:30-20:30 20:30-23:00	宝鶏市渭濱区インターネット産業パーク視察 ・日中青年起業経験交流会 昼食 東嶺コミュニティと青年の宿場クラブ訪問 ・宝鶏市金台区陳倉鎮東嶺村視察 ・金台区青年社会組織青少年社会養成インキュベーションセンター 視察 ・東嶺慧佳幼稚園にて地元児童と交流 宝鶏文理学院訪問 ・キャンパスツアー（グループ別） ・サークル活動見学・体験 ホテル着 馬贊宝鶏市人民政府市委常委常務副市长主催歓迎会 日中青年文化交流 ・パフォーマンス鑑賞及び披露 ・工芸品絵付け体験	宝鶏
8	10月30日 (火)	10:00 12:00 15:00-18:10 18:30 20:00 21:00	宝鶏市陳倉区坪頭鎮にて貧困支援活動視察 昼食 宝鶏工作機械グループ有限公司視察 ・「一帯一路」構想座談会 夕食 宝鶏駅発（高速鉄道） 西安北駅着	↓ 西安
9	10月31日 (水)	8:55-10:20 10:20-11:35 11:45 14:30 18:40 19:30 19:40	西安市高新技術産業開発区視察 西安市コーヒー起業基地インキュベータ視察 昼食 西安北駅発（高速鉄道） 成都東駅着 ホテル着 夕食	↓ 成都
10	11月1日 (木)	9:00 9:20-11:10 12:00-13:00 13:00-14:00 14:00-14:30 14:30-16:15 16:15-17:10 17:30	成都理工大学訪問 アジア文化と青年フォーラム ・伝統演劇「川劇」講義と体験、史料修復に関する講義及び修復作業実演 ・日本青年よりプレゼンテーション ・昼食 ・サークル活動見学・体験 ・大学歴史陳列館視察 ・地質災害防止・地質環境保護の国家重点実験室視察 ・青年学生代表座談会 夕食	
11	11月2日 (金)	9:05-11:50 12:20 13:50-16:15 16:30 18:30-21:30	成都ジャイアントパンダ繁殖研究基地視察 昼食 成都青年之家1号旗艦店にて青年ボランティア活動座談会 ・四川省災害ボランティア活動について5団体代表者より発表 ホテル着 張栄四川省青年連合会主席主催歓送会	
12	11月3日 (祝・土)	9:30 15:00	成都発（NH948） 東京（成田）着	↓ 東京

10月23日

史家胡同博物館

訪問先都市	北京
面会者	孟洋 (Meng Yang) 中華全国青年連合会国際部副部長 閻小竜 (Yan Xiaolong) 北京陳式太極拳研究会副秘書長 史家胡同博物館ボランティア
コメント	史家胡同博物館は、文化大革命時期の文人や政治家の当時の生活の様子が保存されている博物館である。ガイドによる博物館の案内後、孟洋副部長から滞在日程の説明があった。さらに中国青年のボランティア活動紹介に加え、閻小竜副秘書長による太極拳講座を受講した。1950年代の中国の生活の様子は、日本の古い生活に近い部分も多くあり、非常に興味深かった。

呂偉中華全国青年連合会副秘書長主催日本訪問団既参加青年との交流夕食会

訪問先都市	北京
面会者	呂偉 (Lyu Wei) 中華全国青年連合会副秘書長 孟洋 (Meng Yang) 中華全国青年連合会国際部副部長 他
コメント	那家花園にて、平成30年8月に来日した中国青年代表団との交流夕食会が開かれた。交流夕食会では、中国青年代表団団員の紹介があった後、呂偉団長より乾杯の挨拶があった。中国側から歌の披露の後、日本側は『朋友』を歌唱し親睦を深めた。

10月24日

李柯勇中華全国青年連合会副主席表敬訪問

訪問先都市	北京
面会者	李柯勇 (Li Keyong) 中華全国青年連合会副主席 賈波 (Jia Bo) 中華全国青年連合会副秘書長 張季風 (Zhang Jifeng) 中国社会科学院日本研究所副所長
コメント	中華全国青年連合会は、中国共産主義青年団を核とする各青年団体の連合組織である。李柯勇副主席を表敬訪問し、副主席より歓迎の挨拶と、日中両国の友好関係の歩みについてお話をいただいた後、質疑応答の時間をいただいた。その後、張季風副所長による『「十九大」と中国における経済社会総合発展及び展望』をテーマとした講義を受けた。温かな歓迎に訪問国活動への期待が一層膨らむと同時に、派遣団の一員としての使命感が一層強固なものとなった。

Kr Space

訪問先都市	北京
面 会 者	Kr Space国際業務総監 北京維応科技有限責任公司 北京西犀伝播有限公司創業者 北京艾優科技有限公司創業者
コ メ ント	Kr Spaceは、ビジネス用レンタルスペース事業を中心とした革新的な方法で、若者の起業・イノベーションの支援を行う企業である。社内視察の後、交流会を行った。日中青年による起業に関する交流会では、Kr Spaceを利用し起業した三人の中国青年から、それぞれの中心事業である、中古本販売、ミュージアムガイドのアプリケーション、事業コンサルタント業務についての説明を受けた。その後、質疑応答の時間をいただき経営者の熱い思いを聞くことができた。中国青年の起業への想いを聞くことで、中国の急激な経済成長を支える人々の志に触れることができた。

伍偉中華全国青年連合会副秘書長主催歓迎会

訪問先都市	北京
面 会 者	伍偉（Wu Wei）中華全国青年連合会副秘書長
コ メ ント	伍偉中華全国青年連合会副秘書長主催の歓迎会が開かれた。日本側は『東京五輪音頭-2020-』を披露し、また中国側からは、歌の披露があり歓待を受けた。中国の第一線で活躍する方々と夕食を共にできたことは非常に貴重な経験となった。

10月25日

中国人民抗日戦争記念館

訪問先都市	北京
面 会 者	中国人民抗日戦争記念館副館長
コ メ ント	中国人民抗日戦争記念館は、1931年の九・一八事変（満州事変）から1945年までの14年に渡る抗日戦争（日中戦争）の歴史を記録している記念館である。私たちは、抗日戦争関係の文物や写真、歴史人物の遺品、文献、書籍などの展示を、中国青年と共に視察した。

北京第二外国語学院

訪問先都市	北京
面 会 者	孔徳穎（Kong Deying）中華全国青年連合会国際部副部長 朱佩芳（Zhu Peifang）北京第二外国語学院副校長 尹正（Yin Zheng）北京第二外国語学院日本語学院党総書記 林壘（Lin Zhao）北京第二外国語学院日本語学院准教授
コ メ ント	北京第二外国語学院は、グローバル人材育成を目的に周恩来首相が提案し、1964年に開校した総合大学である。ここでは、「日中平和友好条約締結40周年記念フォーラム－日中青年友好フォーラム」が開催された。フォーラムでは、笹島誉行団長及び孔徳穎副部長による挨拶並びに、林壘准教授の「師弟共に中日友好の橋を築く」と題した講演を聴講した。その後、「私と日本/中国の物語」をテーマに、日中双方の代表青年から発表を行い、さらに、6テーマ（日本人と中国人、スポーツ、文化教育、経済、環境保全、マスメディア）に分かれてグループディスカッションを行った。フォーラム閉会後の大学のキャンパスツアーや、学生食堂での食事会を通じて、中国青年との交流を深めた。両国学生が同じテーマで話し合うことで、両国の文化的社会的背景の差異に気付くと同時に、それらを尊重し合うことの重要性を強く感じ、非常に有意義な時間となった。

10月26日

故宮博物院

訪問先都市	北京
コメント	故宮博物院は、明・清時代の24人の皇帝の居城であった旧皇宮で、中国最大規模の博物院である。1961年に中華人民共和国国務院によって全国初の「重点文物保護単位」の一つとなり、1987年ユネスコ世界遺産に指定された。ガイドによる博物館の案内とともに主要な建物を視察し、歴史について学んだ。建築物や、装飾品の数々を実際に目にし、中国の悠久の歴史を感じることができた。

在中華人民共和国日本国大使館表敬訪問

訪問先都市	北京
面会者	森田 悠介 広報文化部一等書記官
コメント	森田一等書記官から、外交官の業務内容と業務を通じて感じる中国についての講演を聴講した。中国におけるインターネットを通じた広報活動の重要性や、日本との生活習慣や文化の差異についてお話しいただき、日中間の交流について新しい知見を得ることができた。

中国国際青年交流センター

訪問先都市	北京
面会者	李士竜 (Li Shilong) 北京国際青年研修学院常務副院長
コメント	中国国際青年交流センターでは、餃子作りを体験した。餃子は、伝統的家庭料理であり、年中行事とも結びつく、中国の文化を色濃く反映した料理である。体験を通じて、中国の食文化の地域差や、生活文化について学習した。餃子という食べ物についてのみならず、「餃子を家族みんなで作り、食べる」という行為に文化的意義を感じることができ、非常に興味深かった。

10月27日

秦始皇帝陵博物院 (兵馬俑)

訪問先都市	西安
コメント	秦始皇帝陵博物院は、1987年に世界文化遺産に登録された、秦朝の皇帝である始皇帝の墓とその周辺の兵馬俑坑である。ここでは、ガイドの案内の下、出土した兵馬俑の様子や、文化遺産の修繕、保護、発掘の様子を視察し文化財保護について学ぶことができた。実際に兵馬俑の壮大な様子を目にし、中国秦朝の時代に思いを馳せた。

西安国際港務区規画館

訪問先都市	西安
コメント	西安国際港務区規画館は、西安国際港務区の都市計画に関する写真資料と立体模型が展示されている展示館である。西安国際港務区は、中国内陸部北西地区で初めての総合保税区である。ここでは、西安国際港務区の都市模型や、西安国際港務区の変遷についてのパネル展示を視察し、発展の速さと地理的優位性を知ることができた。

中西部陸港金融小鎮

訪問先都市	西安
コメント	中西部陸港金融小鎮は、西安国際港務区内にある、金融サービスと資産運用関連企業の集まる金融特区であり、中国内陸部北西地区最大の商品複合型現代物流プラットフォームである。さらに、この場所は「一帯一路」構想における中心拠点である。ここでは、金融商品取引所の様子を視察し、参入予定企業の事業内容についての説明を受け、都市開発の取り組みを知ることができた。

西安港中欧班列運営センター

訪問先都市	西安
コメント	西安港中欧班列運営センターは、中国と欧州を結ぶ国際定期貨物列車である、西安鉄路（中欧班列）のコンテナセンター事務所である。このセンターは中国の陸路による物流拠点の中心であり、「一帯一路」構想の中心拠点である。ここでは、西安・ワルシャワ区間、西安・ハンブルク区間の二つの貨物路線の物流の様子、さらには構想中の西安・モスクワ区間に関する説明を受けた。事務所での説明の後、バス車内から実際に西安鉄路コンテナセンターの様子を視察し、貨物輸送の重要性を学ぶことができた。

10月27日、28日

西安外国語大学

訪問先都市	西安
面会者	馬潔 (Ma Jie) 西安外国語大学共産党委員会副書記 単升軍 (Shan Shengjun) 西安外国語大学共青团委員会書記
コメント	西安外国語大学は、中国で最も早期に創立した四つの外国語専門大学の一つである。27日は、日中青年座談会の後、ホームステイマッチングを行い、各自1泊2日のホームステイを体験した。28日には、ホームステイの振り返り会を行った。日本側、中国側それぞれからホームステイの所感を発表した後、雷佳琪氏より陝西省の伝統演劇「秦腔」の講義を受講し、舞台動作や衣装試着を体験した。さらには、陝西省青年合唱団による合唱の披露があった。その後の食事会で中国青年とさらなる交流を深めた。

10月29日

宝鶏市渭濱区インターネット産業パーク

訪問先都市	宝鶏
面会者	陝西省宝鶏市渭濱区人民政府区委常委副区長
コメント	宝鶏市渭濱区インターネット産業パークは、中国のIT技術を利用して事業を行う企業のプラットフォームである。無農薬野菜の製造と販売を行う企業、食肉市場の情報管理を行う企業、産業用ドローンの開発を行う企業の計三つの企業を訪問した。実際にIT技術の利用される様子を見学した後、質疑応答の時間で各企業の取り組みを知った。その後、青年起業経験交流会が開催され、中国側から農業事業の起業について話を伺った後、日本青年3名より「青年の起業とイノベーション」に関するプレゼンテーションを行い、互いに学びを深めた。

東嶺コミュニティと青年の宿場クラブ

訪問先都市	宝鶏
コメント	東嶺コミュニティは、陝西省宝鶏市金台区陳倉町に所属する東嶺村を主体とする組織で、住民の暮らしを豊かにするための様々な取組みを行っている。また、青年の宿場クラブは、青年の育成、活動の促進を目指した施設である。ここでは、コミュニティにおいて盛んに行われているボランティア活動を始めとする地域貢献活動を視察した。その後、東嶺慧佳幼稚園にて地元の児童と一緒に絵を描くなどして交流を楽しんだ。

宝鶏文理学院

訪問先都市	宝鶏
面会者	宝鶏文理学院書記
コメント	宝鶏文理学院は、陝西省人民政府に属する普通本科大学であり、多数の学科専攻を有する総合大学である。校内の博物館見学を通じて大学の沿革を学ぶと共に、アニメサークルや水墨画サークルによる発表を観賞した。学内外で活躍している青銅器やヌンチャク、書道のサークルの見学・体験を通じて学生との交流を深めることができた。

馬贛宝鶏市人民政府市委常委常務副市長主催歓迎会

訪問先都市	宝鶏
面会者	馬贛（Ma Yun）宝鶏市人民政府市委常委常務副市長
コメント	建国ホテルにて、馬贛副市長主催による歓迎会が行われ、宝鶏市青年連合会の方々と食事を共にした。中国の伝統的な舞踊、楽器、書道等の演目で歓待を受け、日本側からは日本文化の紹介として『東京五輪音頭-2020-』、SMAPの『世界に一つだけの花』を披露し親睦を深めた。

10月30日

宝鶏市陳倉区坪頭鎮

訪問先都市	宝鶏
コメント	宝鶏市陳倉区坪頭鎮は、政府の貧困対策により観光地として発展を遂げた農村である。バス車内から村の移転前の場所と移転先の様子を視察した。また、移転先の家庭を訪問し、実際に農村地域に住む人々の生活の様子を見学した。ここではその家庭で郷土料理を試食した。さらに、村の発展の様子のパネル展示を見学し、貧困扶助の取組みについて学ぶことができた。

宝鶏工作機械グループ有限公司

訪問先都市	宝鶏
面会者	宝鶏工作機械グループ有限公司集団総経理
コメント	宝鶏工作機械グループは宝鶏市にある金属加工機製造・販売を行う企業である。「一帯一路」構想座談会では、企業の代表者から「一帯一路」構想を背景に行われた海外投資と対外交流の経験についての発表があった。日本青年2名からは、「一帯一路」構想についての個人的な理解度と認識を発表し、お互いの意見を共有した。

10月31日

西安市高新技术産業開発区

訪問先都市	西安
面 会 者	西安創業園投資管理有限公司商務拓展部総監
コ メ ント	西安市高新技术産業開発区は西安の中心都市であり、ソフトウェア、金融、貿易の中心として再開発が行われているスマートシティである。ここでは、高新技术産業開発区の都市模型や、高新技术産業開発区の変遷についてのパネル展示を視察し、中国におけるハイテク産業の一大集積地の取組みを学んだ。

西安市コーヒー起業基地インキュベータ

訪問先都市	西安
コ メ ント	西安市コーヒー起業基地インキュベータはコーヒーを提供するカフェを中心媒体として、起業家向けにサービスや環境を提供し、起業や新規事業開発を促進する取組みを行うプラットフォームである。ここでは、インキュベータ創設の変遷についてのパネル展示を視察し、職員からの説明を受けた。その後、実際に施設内外を訪れ、実際の取組みを視察した。中国における起業支援の様子を学ぶことができ、有意義な時間となった。

11月1日

成都理工大学

訪問先都市	成都
コ メ ント	成都理工大学は国土資源部と成都市が共同運営する地方重点大学であり、中国の地球科学分野の人材育成と科学研究に注力している大学である。ここでは、「アジア文化と青年フォーラム」が行われた。まず、四川省の伝統演劇である「川劇」の講座で舞台動作を体験し、その後の中国の史料修復に関する講座では、実際の修復作業の様子を見学し文化保全活動を学んだ。また、日本青年から「伝統工芸の伝承に貢献する若者の起業」についてプレゼンテーションを行った。昼食後は、武術や書道サークル活動に加えドローン空撮の見学・体験、大学構内の地質災害防止・地質環境保護の国家重点実験室を視察した。最後に、青年学生代表座談会が行われ、成都理工大学と日本青年双方の代表が「ボランティア活動と起業について」をテーマに発表した。同世代の学生とのディスカッションにより、両国の起業の様子に関して知見を得ることができた。

11月2日

成都ジャイアントパンダ繁殖研究基地

訪問先都市	成都
コメント	成都ジャイアントパンダ繁殖研究基地は、絶滅危惧種であるジャイアントパンダを保護し、繁殖研究を行っている施設である。ここでは、繁殖と生態研究のみならず、野生環境へパンダを返す研究を行っており、環境への適応訓練のために広い敷地で飼育されているパンダを視察し、動物保護について学んだ。

成都青年之家 1 号旗艦店

訪問先都市	成都
コメント	成都青年之家 1 号旗艦店は、ボランティア活動を始めた青年主体の活動を活性化するためのプラットフォームである。ここでは、青年之家の施設紹介を受けた。さらには、青年ボランティア座談会が行われ、四川省における災害ボランティアの活動について5名の中国青年から発表があった後、質疑応答の時間をいただき、災害時に活動する上での具体的な内容を学んだ。

張栄四川省青年連合会主席主催歓送会

訪問先都市	成都
面会者	張栄（Zhang Rong）四川省青年連合会主席
コメント	四川省青年連合会主催による歓送会が開催された。張栄主席による挨拶の後、成都理工大学の学生による古箏とフルートのパフォーマンスが披露された。日本団は『東京五輪音頭-2020-』を披露した。また、周華健の『朋友』を参加者全員で肩を組み歌唱し、別れを惜しんだ。

「40番目のバトン」を未来へ

笹 島 誉 行

1. はじめに

日本・中国青年親善交流事業は、昭和53年の日中平和友好条約締結を機に、日中の共同事業として昭和54年から開始されたものだが、今年度は節目の40回目となった。また、今年は日中平和友好条約締結40周年に当たり、派遣中に総理が7年振りに訪中して首脳会談を行うなど、日中関係が新たな段階に入っていく転換点でもあった。

第40回日本青年中国派遣団（以下「40団」という。）は、40年前の日中平和友好条約発効の日である10月23日に日本を立ち、北京、西安、宝鶏、成都と回って11月3日無事帰国した。この間、すべて晴天続きで、北京の故宫博物院訪問の時は強風で寒かったものの、毎日青空の下で記念写真が撮れたのは、晴男、晴女の集まりだったのかもしれないが、幸運なことであった。

また、2年前の28年度は中国からの招へいは中止で派遣は年度末の3月実施となり、昨年度は実施の確定が遅れ、募集日程や事前・事後の研修に制約があったことを考えると、今年度は、現地スケジュールの詳細が出発前のギリギリにはなったものの、ほぼ通常通りの形に戻ったといえる。日中関係の変化なども含め、今後の日中交流の新たなスタートという面もあると思うので、全体的な観点から総括してみたい。

なお、個人的なことを言えば、今回の事業実施に当たっては、22年前の本事業担当の参事官であり、国際交流との関わりの集大成として何かご恩返しをしたいという思い、「世界青年の船」と「東南アジア青年の船」の管理官として参加した経験や中国青年受入れでディスカッション・コーディネーターを何年か務めた経験から交流の意義や楽しさを青年に伝えたいという思い、さらには、自らが中国という国を深く知るきっかけとし、自らを高めたいという思いがあった。どこまでできたかわからないが、自分として何某かの達成感を感じることができたのは、元気にプログラムを終え、成長した顔を見せてくれた青年たちのおかげかもしれない。

2. 今回の派遣の位置付け

40団としては、まず同時期の安倍総理訪中との関係を

押さえておく必要があるだろう。総理は、習近平主席との首脳会談で「日中関係を新しい時代へ押し上げていきたい」といった発言を行い、一帯一路関連でも、第三国支援という形での合意がなされた。また、李克強首相との間では、若い世代の交流を拡大すべきとの認識で一致し、来年を「日中青少年交流推進年」とし、今後5年間で3万人規模の交流を進めるという覚書に署名した。来年も様々なイベントがあるかもしれない。

我々の訪中においても、平和友好条約締結40周年を機に日中友好を発展させていきたいというムードが溢れていたことはありがたいことであった。この関係で、北京では北京第二外国語学院で記念フォーラムが開かれ、私からは、総理訪中の意義、2000年近い日中交流の歴史と近年の経済関係や人的交流の拡大、日中国交回復とパンダ来日、青年交流の重要性、一衣帯水の関係にある日中が協力して解決できる課題、解決しなければならない課題は沢山あり、40周年という節目は、新たな友好協力関係のスタートになることなどを述べた。その後、大学側から講演があり、続いて日中の青年それぞれ3人から「私と日本/中国の物語」というテーマでプレゼンが行われ、テーマ別のディスカッション交流も行われた。日本青年からのプレゼンは通り一遍のものではなく、聞かせる内容であったと思う。

なお、このフォーラムの前に中国人民抗日戦争記念館への訪問が予定されていたため、出発前研修において、「心の準備」として参加青年に対し、広いコンテキストで「戦争」というものを捉えること、建国の歴史と戦争博物館の関係などについて話をした。訪問当日は、朝から北京第二外国語学院の学生が同行するなどの配慮もあって青年たちがショックを受けるようなことはなかったようだし、訪問の意義はあったように思う。私もインタビューを受け、平和の大切さと日中関係の重要性を学んだと答えたが、中国側も、抗日戦争があったことを知った上で、日中友好の大切さを分かってほしい、友好関係を発展させたいというような考えであったように思う。

一方、訪問都市の選択や、ディスカッションに至るまで、重要テーマとして貫かれていると感じたのは、一帯一路である。訪中期間中も、その趣旨や日中協力の重要

性について、専門家の講義から、工場での職員の話、通訳の案内に至るまで様々な角度から説明があり、中国側の真剣さを感じた。

西安はシルクロードの始点であり、成都是インドに至るルートの拠点であったが、現在においても、両者はヨーロッパへの鉄道輸送の拠点として首位争いをしている。私も、スピーチの中で遣隋使・遣唐使の話、鑑真の話（仏教の指導のほか、福祉施設の建設や、漢方医学の指導など、文化交流・技術交流の先駆けとなった。）、正倉院がシルクロードの終着駅といわれることなど、シルクロードを通じた日中交流は1400年以上の歴史があることに言及した。

一帯一路に関しては、個別のインフラ整備事業については色々議論があるところであるが、西安の国際貿易物流パーク（広さは山手線内の面積の2/3もある）で、欧州への鉄道路線図を見ていると、それをシルクロードと呼ぼうと、一帯一路と呼ぼうと、ユーラシア大陸全体を見渡す地理感覚というものが実感できる。これは日本青年にとってもよい刺激になったのではないかと思う。

なお、一帯一路構想の最前線で国際展開している企業の青年から、現場での心と心の交流の大切さを述べていたのが印象的だったので、成都での送別会スピーチで、青年交流の原点というような形で紹介させてもらった。

3. 青年の構成、研修、団目標

40団は団長以下25人で、参加青年20人のうち男9人、女11人と例年より男女のバランスがよく、また、社会人が6人というのも例年より多いようで、多様性の確保に寄与したと思う。20人というのも、本来の25人よりは少ないが、団体行動のし易さ等を考えると、適正規模に感じた。青年だけで食事をする場合、丸テーブル二つで丁度20人だった。

事前研修においてユースリーダー（YL）とアシスタントYL（AYL）を自薦と選挙で決めた。AYLは総務、日本紹介、記録の各班に配置したが、情報伝達等の面で機能したと思う。なお、YL不要論もこれまであったようだが、団を統率するような位置付けではないものの、現地で青年を代表して挨拶する機会があり、誰かが仕切らなければならないことは結構あるので、今後とも必要だと思う。40団のYLもこの事業の中で成長したのではないかと思う。

事前研修では、団目標として、中国語の愛と日本語の愛を組み合わせ、「中国語の愛には「友」が、日本語の愛には「心」があり、日中間で友好を結び、心と心でつながりあいたい。」というメッセージとしたが、わかりやすくよかったと思う。例年、団目標を団長挨拶で紹介するのが通例のようだが、今年のものは見ないとわからないので、文字がデザインされている団パーカーを示

せる時にのみ紹介した。また、団パーカーには参加青年がデザインしたトキの絵もあり、スピーチなどで、日本のトキが陝西省から送られたつがいから繁殖したものであることなど、日中友好のシンボルとして紹介したら、中国側の全員がそのことを知っており、よい交流ネタとなった。

事前の研修では、「やった者勝ち」であること、今までとは異なる自分にチャレンジするチャンスであること、チャレンジして失敗したり恥をかくても人生に何らマイナスにならないことなどを強調した。青年たちは、研修時や派遣時における急な対応においてもすぐ誰か手が上がっていたし、やる気、仕事の速さ、プレゼン能力は素晴らしかったと思う。また、帰国後研修の振り返りにおいて、積極性などで自分が変わったと述べた青年がかなりいたことはうれしかった。

また、自分の過去の経験（中国青年とのディスカッション・コーディネーター）を話す中で、「似ているようで異なるもの、異なるようで似ているものを探すのがコツ」と述べたら、団目標にも組み込まれた。これは成果を聞く機会がなかったが、ディスカッションというよりも、中国での様々な体験の中で色々発見があったのではないかと思う。

事前研修においては、パッケージとしての研修内容はよく出来ていて、（一財）青少年国際交流推進センターの説明も慣れたものであった。ただ、日中関係の厳しい時代の名残もあり、「べからず集」や留意点が多く、こうすればうまくいくといった「ヒント集」やモチベーションを上げる内容がもっとあってもいいように思った。

また、日中ともフォーマルさや厳粛さが減ってきているのは時代の流れかと思うが、研修において団長は威厳が重要とか、日本青年の代表としての意識を持つということと言われるものの、具体的な仕掛けがないのが気になった。昔のような天皇陛下へのご拝謁などは無理にしても、政府側として、フォーマルな決定書の交付式でも、内閣府での表敬でもよい（相手は政治家が理想だがこだわらない。青年には永田町、霞が関自体も刺激になる。）ので、何か青年たちが引き締まる場面が欲しいと思った。

今回の事前研修で唯一フォーマル感があったのは、中国大使館訪問であった。中国大使館への訪問自体も珍しい体験だし、かつて中華全国青年連合会（以下全青連）でこの事業に長く関わっていただいた倪健参事官からの流暢な日本語による講義と若手大使館職員との懇談は、よいイントロであり、日本青年代表としての自覚を促す効果があったと思う。大使館のご配慮に深く感謝申し上げたい。

なお、事前研修とは直接関係はないが、訪日の中国代

表団との関係も指摘しておきたい。北京での全青連主催での歓迎会で、今年度の訪日団に参加した北京近郊の青年が11人も集まってくれ、その熱意に感激するとともに、中国での交流プログラムのよいスタートとなった。ところが、彼らが日本に来た時の歓迎会は自由参加なのでごく僅かの青年が来ていただけで、地方受け入れに関係した青年を入れても日本で接点があった者は極めて少ないため、北京での再会の喜びがなくてもったいないと思った。

旅費が出るわけではなく、また仕事や学業で忙しい青年もいると思うが、そもそも、事前研修で歓迎会等に参加する意味が伝えられていなかったと思う。私自身も青年が自然に集まるものと思っていて自ら働きかけなかったことを後から反省したが、単に自由参加ですというだけでは、事務的過ぎるのではないか。

4. 学生交流、ホームステイ、パフォーマンス

今回は、上述の北京第二外国語学院に加え、西安外国語大学及び成都理工大学で大学キャンパスに行つての学生交流があった。これはプログラムとしてよかったと思う。様々な交流メニューが盛りだくさんで青年たちも大変だったかもしれないが、満足度は高かったと思う。大学の規模の大きさ（西安外国語大学の日本語専攻の学生だけでも1000人）や、全寮制でキャンパスが一つの街のようになっていることにも驚くし、学生食堂で何回か一緒に食事をしたこともよい経験になったと思う。

またどの大学も、レベルは区々でも日本語を学んでいる青年が集められていたため、中国語ができない日本青年でも交流ができたというメリットがあった。日本人と話す機会は初めてという青年も多かったことから、もし日本青年がよい印象を残してくれたら、これからの日中友好に大きな財産となると思った。

今年は、ホームステイ先も西安外国語大学の学生の家で、家庭数が多かったため、殆どが一人でホームステイをした。マッチングセレモニーでは、日中の青年のペアがそれぞれ挨拶し、拍手で送られて会場を出ていくという演出だったが、思わず「頑張れ」と言いたくなるような雰囲気だった。今年のホームステイは時間が短かったという感想もあったが、この事業のハイライトでもあり、最も記憶に残るイベントである。ホストファミリーの青年たちと別れた後、バスの外で見送りながら一人大泣きしている中国青年が印象的だった。

夕食会等で披露する青年のパフォーマンスのメインは東京五輪音頭-2020-で、赤いハッピーを着ての踊りを中国側にも参加してもらって盛り上げ、最後に中国語で2020年に東京に来てくださいという横断幕を掲げてアピールした。今年は北京オリンピックから10年、2022年は北京で冬季オリンピックが予定されており、オリンピックつ

ながりの感覚は共有できたのではないかと思う。

また、現地での急な仕込みで、暗闇でペンライトを持って踊るオタ芸ダンシングヒーローも披露した。格調の高い中国側の出し物と対照的であったが、今後、肩の力を抜いた若者らしい交流になっていくとするなら、流れに沿ったものといえるのかもしれない。また、これを披露した2回の夕食会での中国側のトップは、日本的に言えば非常に若く、感覚的なずれはなかったように思う。中国の人材登用や世代交代のダイナミズムも日本青年が感じてくれたかもしれない。

成都の送別会では、YLからの感謝の言葉の後、中国側も一緒になって肩を組んで朋友を歌ったが、これはやはり定番だと思った。私自身もこれだけは練習してきた。

5. 青年の起業、地域発展

青年の起業というテーマは、近年日中交流の定番メニューになっているようだが、今ある中国の世界的企業もスタートアップ時は小さなベンチャー企業に過ぎなかったわけで、中国青年の失敗を恐れないチャレンジ精神など、日本青年により刺激になると思う。

今回は、北京での起業・イノベーションプラットフォームであるKr Space、宝鶏での渭濱区インターネット産業パーク、西安市コーヒー創業基地（コーヒーを飲みながら議論するという意味）などで、最先端かつ多様な取組を視察するとともに、宝鶏では日本青年からのプレゼンも行った。

中国の現状については、最新データでは800万人の大学卒業生がいるため、企業に就職できない学生は起業をせざるを得ないのだという解説もある。帰国したら中国新四大発明といわれるシェア自転車の企業が危機にあるというニュースが流れていた。総理対応で閑散としていた北京の日本大使館で対応してくれた森田悠介一等書記官も、シェア自転車のように一気に広がって一気に撤退するようなことは珍しくないと言っていた。

しかし、100人のうち1人しか成功しなくてもその一人が100人雇えばよいという割り切り、失敗したらすぐ撤退して次に進むという切り替えの早さは、日本として見習うべきところでもある。経済社会の閉塞感が漂う日本としては、刺激を受けたであろう青年たちのこれからの期待したいところである。古い世代の私としては、中国で起こる問題をもっともらしく講釈しているうちに日本は取り残されてしまうのではないかという懸念も感じた。

なお、今回の訪問地である西安、宝鶏、成都は、一帯一路つながりというだけではない。中国の地域格差を何とかしなくてはならないという問題意識は、北京での講演でも強調されていたが、これらの都市は、西部開発の

拠点でもあり、深圳ほどの最先端性はないかもしれないが、開発・発展のスケールの大きさは目を見張るものがある。開発面積〇〇km²と言われても規模感がピンとこないの、前述の山手線の広さとか、日本での尺度をネットで調べながら説明を聞いていたが、西安市高新技術産業開発区の総面積は、ほぼ東京23区と同じ広さであった。

6. 移動とスケジュール管理

今回は、西安から宝鶏の往復、西安から成都までの移動は、高速鉄道であった。秦嶺山脈を貫いて走る西安・成都間の路線は、昨年12月に開通したばかりで、大きなスーツケースはデッキ周辺には置ききれず座席の間に置いたりして窮屈ではあったが、皆列車の旅を楽しんだようだ。荷物検査もあるので大人数での乗車に当たっては、中国側にかなりのご配慮をいただいた。青年たちも、特別な配慮を受けているということは理解したと思う。

今後も、高速鉄道は、採用してよい移動手段だと思う。車窓からの景色は楽しめるし、空港のような巨大な駅も刺激になる。また、中国では、昨年1年間で日本の新幹線の総延長と同じ距離の路線を新しく開通させ、既に世界の高速鉄道網の2/3の距離になっているといわれており、そのスケール感も勉強になると思う。

40団におけるスケジュールについていうと、今回は、移動が多く、ホテル到着が9時以降というのも何回もあり、青年たちにあまり余裕がなかったように思う。

また、郊外のホテルが多かったため、街歩きを楽しめたのは、成都に行ってからであったが、最終訪問都市での成都ジャイアントパンダ研究繁殖基地訪問と夜の自由時間での散策は、青年たちにゆっくり中国の雰囲気を楽しむ喜びを与えたと思う。

中国側のスケジュール管理は、道路の渋滞や手続時間、トイレタイムなども想定されていて、長年の蓄積を感じた。ただ、タイトなスケジュールの中で視察が盛りだくさんのため、青年たちが用意したプレゼンができなかったり、質問時間が十分とれないといったことはあった。

なお、日程がタイトだと、夜の振り返りの時間や青年たちの横の情報交換の場が十分とれなくなるという問題もあり、団長側にとっても、青年たちからその日の活動の感想や困っていることなどを聞く機会が十分に取れなかったことは反省点である。

7. ネットでのつながり

中国の場合、事前研修から訪中までの期間が長く、団員たちはLINEで連絡や進捗状況の管理を行っていた。踊りの練習でもネット画像で振りを合わせていたようである。我々もLINEに入っていたので、青年たちとの情

報共有や連絡ができて助かった。

中国では、LINEが使えないことから、事前研修中に全員がWeChatに入り、現地ではWeChatで連絡を取り合った。写真の交換も容易で、私も帰国後、早速WeChatでお礼のメールを送った。便利な世の中になったものだと思う。

今回は、学生との交流が多かったのも、青年たちも数多くのWeChatアドレスを交換したようであり、これが未来の日中友好を支えるネットワークになっていくことを期待している。

個人的なチャレンジを言うと、今回、スピーチ作成を現地でiPadを使って行った。主に列車やバスでの移動中に作成した原稿を添付ファイルにしてレンタルしたWi-Fiで渉外にメールし、ホテルでプリントアウトしてもらったという方法をとった（ホテルのビジネスセンターは昼のみだったりして活用できなかった。）が、現地での状況を踏まえたスピーチを機動的に作れたことは非常によかった。当日直しも多く、引き受けてくれた大脇渉外に感謝しかないが、今後のスピーチ作成においても検討してみてもどうか。

8. おわりに

青年たちにも言ったが、お互い全く知らない者が突然集まり、年齢も異なり、学生・社会人あり、中国との関わりも多様なのに、ニックネームで呼びあい、研修期間を入れてもたったの20日程度、非日常的な異空間を共にすると、一生の友人のような気持ちが沸いてくる。別に誰かが仕組んだわけではないのだけれど、不思議なもので、私は「交流マジック」と呼んでいる。

青年たちも、40団という仲間を大切にしてほしいと思う。事業はこれで終わるが、友情は一生である。そして、40団の団目標である「40番目のバトンを未来へ」というのは、これからである。今回の中国訪問を活かし、これからの人生の色々な局面で、日中友好の懸け橋となることを期待したい。

事前研修の最初に、団長・副団長といっても、団員を管理するためだけにいるわけではなく、団長も、団長という役割を持つ40団の団員なのだという話をした。また、団長も、副団長も、渉外も、それぞれがチャレンジし、成長するのだという話もした。皆それぞれ何らかの成果はあったと思う。

この場を借りて、両副団長には、あまり悩まず、いつも楽観的にいる団長を支え、スケジュール管理や団員との対応などで苦勞していただいたことに心から感謝したい。また、高い語学力を持ち、明るく団員たちに溶け込みながらも団員たちに寄り添ってサポートしてくれた両渉外には、40団の成功の大きな立役者であると賛辞を贈りたい。

最後に（but not least）、この事業にご尽力いただいた中華全国青年連合会、陝西省及び四川省の青年連合会、中国国際青年交流センターの方々に心から感謝を申し上げます。きめ細かな対応、心のこもったおもてなしには、感謝の言葉しかない。

40団で積極的に活動してくれた青年たちに、ありがとうの言葉と未来に向けたエールを送りつつ、私の報告を終える。

両国をつなぐということ

私にとってこの派遣は悔しさと挑戦の連続であった。だからこそ人一倍成長でき、自らの今後に向けての課題も見えてきた。この事業の出来事を自分で整理し、次の新たな自分に、そして次の代にうまく伝えられるようこのレポートを書きたいと思う。

この事業で特に印象に残ったことが三つある。

一つ目は中国に着いた初日の交流夕食会である。中国に着いてほんの数時間の時、私たちは何か堅苦しい緊張感があった。その空気を中国の方は見事に温かく受けとめ歓迎してくれたのだ。中国人は人を楽しませたり、緊張をほぐしたりするのが本当に上手である。そして、つながりを大事にする。社会人のもてなしに慣れていない学生の私は、何を話せばいいかわからず、ただ感謝の言葉を口にするしかできなかった。積極的に自分から中国語で現地の人と喋ることを目標の一つとし、さらには会話することに少し自信があった私にとってその出来事は本当に悔しかった。うまく輪に入りきれず、ただ受け身ばかりの自分をどうして良いのか分からなかったのだ。初日から痛烈なパンチを食らった私は、このおかげで残りの中国滞在を自分が思う以上に会話することに力を入れることができた。

二つ目は日中青年友好フォーラムでのスピーチである。これが私にとってこの派遣での最大の挑戦であった。人前で日本語のスピーチをするのですら一苦勞の私であるが、翻訳を通さずに自身で中国語の部分をやることにも挑戦した。これには私なりの思いがあった。「相手の第二外国語は相手の耳に届くが、相手の母国語は心に届く。」という言葉があるのだが、自身も自ら相手の心に自分の言葉を届けたかったのだ。だからこそ中国人の母国語である中国語でのスピーチに挑戦する必要がある。この挑戦は今までの自分と中国の関係を見直す機会となり、そして自分の細かな気持ちを中国語で伝えることができるようになるという成長にもつながった。スピーチ前日、スピーチする者同士で中国への真剣な思いを語り合ったのも忘れられない。普段では恥ずかしくて語ることのない自分の中の中国をぶつけることができた。今まで、私は自身が日本と中国をつないでいるとばかり

かり思っていたが、そこで気づかされたのは中国が私と中国のことを思う日本人をつなげていたことだった。

三つ目は西安でのホームステイである。彼らは中国での方言の多様性、そして人のつながりの輪を教えてくれた。ホームステイの家庭は中国語の普通語ではなく、西安の方言を話しており、最初全くと言っていいほど聞き取れなかった。中国にも方言があるのは知っていたがこれほどまでに違うとは思ってもみなかったのだ。それでも話しかけることを諦めず真似したり、意味を聞いたりすると喜んで教えてくれた。方言は相手の心を掴む重要なスパイスなのだ。そして何よりも中国人は人のつながりの輪を広げていくのが得意だ。ホームステイの家族はお父さんとお母さんと大学三年生の子だったが、結婚して近くに住んでいるお姉さんにも私が来るということを知らせてくれ、わざわざ私に会いに来てくれたのだ。しまいにはおじさんやおばさん、いとこまでもが会いに来てくれ、私はそれぞれとつながることができた。中国人コミュニティは一見入りづらそうに見えることもある。ただ勇気を出して一歩足を踏み入れれば、惜しみなく人を紹介してくれ、あっという間に自身もそのコミュニティの一員にしてくれるのだ。たった1日という短い時間であったが、ぐっと距離が縮まり、大切にしたいと思えるつながりがここでたくさん生まれた。

この事業全体を通して自分は日本の代表なのだという事を常を感じながら動くことができた。だからこそ日本と中国を重ね合わせて考えることが非常に多かった。漢字圏であることや儒教から受け継がれた上への敬意を示す文化を見るとそれほど大差はない。しかし、一方で違いもあった。そのことが顕著に現れたのが人である。中国人は上へ上へと目指す力が強い。今よりもっと良い場所を目指して行く力、自分のものにする力が本当に強い。だからこそすぐに挑戦するし、失敗したからと言って誰もそれを恥ずかしいことだとは思わない。このすばらしい人々の気合いは日本には薄いと感じた。挑戦することを恐れたら決していいものは生まれない。日本人は今の場所を維持するのにあまりにも必死なような気がする。隣国であるため、似ているところも多い。以前、私

は似ているからこそついつい自国の考え方を押し付けて度々物事を見てしまうことが多かった。しかし、よく見てみると似ているようで違う。この事業ではそこを宝探しのように見つけることができ、充実していた。そして違いを見つけたら、これもまた一つの考え方なのだと受け入れることがこの派遣中自然にできるようになっていた。これは私にとって最大の成果だと言えるだろう。

今後はこの事業に参加させていただいたことで得られた成果を三つの点でいかしていきたい。

一つ目はこの事業で自分の五感で感じたありのままの中国を家族や友人、そして自分のコミュニティである大学で広めて行くことである。私がこれをする事で少しでも相手が中国に関心を持ったり、好きになったりしてほしい。私はこんな話を聞いたことがある。「好意の反対は無関心であるということだ。」無関心ということほど相手を傷つける要因になることはないのだ。同じアジアの仲間なのだから日本と中国の関係はこれからも切っても切れない。だからこそお互いが相手に関心を持っていなければいけないと強く思うのだ。そのきっかけが私であるならこれ以上の喜びがあるだろうか。

二つ目は日本にいる中国人に積極的に話しかけることに挑戦することである。何事も話してみないと分からないということをこの事業で痛感した。そして不安や緊張している時こそ、温かく受け入れてくれる人たちの存在のありがたさを感じた。今度はそれを自分がお返しする番である。初めは、日本にいる道端の中国人に話しかけるのは流石に自分にとってハードルが高いので自身は大学内での中国人留学生の新入生サポートを行う予定だ。

三つ目はこの事業の次の担い手を見つけることである。自分自身がこの事業を友人から教えてもらった。だからこそこの友人からもらった特別なバトンを途切れさせたくない。そのためには自身が中国に関心を持ち続け、新しい中国でつながるコミュニティへと入ることに挑戦しなければならない。少し怖いがそれでもまだ自身の知らない世界に入り込めると考えるとワクワクする。

この事業で私は数えきれないほどの中国人とつながった。私がつながったからと言って日中関係がさらに良くなったと言えるまでにはならないかもしれない。成果が本人にしか見えないこの交流という行動はたびたび不安になることも多くある。自分は本当にこうして会話しているだけで何かに役立っているのかと。しかし、この派遣に参加させていただき、ふと感じたことがある。交流はつながり続けていくことが大切なのだ。平成30年度中国派遣団の目標の副題は『未来へつなぐ40番目のバト

ン』であった。私たち40団の団員それぞれが細い架け橋となり、太い道を作り上げ、確実に過去代々受け継がれてきたバトンを、未来へとつなげることができた。そしてこの道を途切れさせないために私は中国語を一生勉強し続け、自信を持って交流を続けていきたいと思う。

「愛×愛」の交流

1. はじめに

第40回日本・中国青年親善交流事業のテーマは、「愛×愛～未来へつなぐ40番目のバトン～」である。「愛」と「愛」は、どちらも同じ「あい」という読みであるが、それぞれ「愛」には、「友」が、「愛」には「心」という字が入っており、「違うようで同じもの、同じようで違うものをたくさん発見していきたい」という思いと共に「心と心の交流で、友情を結んでいきたい」という思いが込められている。そして、これまで40年間、途切れることなく続いてきた本事業を、次の世代にまで繋いでいきたい、という思いを込めてこのテーマを設定した。個人の感想にはなるが、私はこのテーマの通りの交流ができたと感じている。

それがどのようなものであったのかを、本成果報告書では、①印象的だった体験・学んだこと、②本事業を通し成長したこと、③成果を今後どのようにいかしていきたいかと章立て、以下に述べていく。

2. 印象的だった体験・学んだこと

本事業で特に印象に残った体験は、三点ある。一つ目は、中国人民抗日戦争記念館の視察をした際に現地の学生と歴史観に関する話をしたことである。私は、本事業に応募した理由として、「中国の人の歴史観を知りたい」というものを持っていた。そのため、この事業は行く前からとても興味をいだいていたのだが、それと同時に緊張もしていた。しかし、当日バスの中や視察後に一人の女子大学院生の方と会話する中で、とても客観的に日本と中国の歴史と今を見る方だと感じ、緊張はほどけた。「反日感情とか抱かなかったんですか？」との私の問いかけに対しては、「小学校のときは、多少はあったけど、今は自分で考えられるから。あの時代にひどいことをしたのは日本だけじゃないと思う」との答えが返ってきた。また、向こうからも、「日本では、盧溝橋事件や日中戦争について歴史の授業でやらないのか」と問われ、日本でも触れるが、歴史の中でも後半の方になってしまうため、あまり時間が取れない、ということと、日本の教科書に載っている写真は、ここで見たもののほど悲惨でないため、やはりこのような博物館に行き、中国の歴史観を知ることが重要なことであると思う、という内容のことを話した。なかなかこのような、国を超えて歴史観についての話を直接にする機会というのは、稀であったため、非常に貴重な体験ができたと感じている。



中国人民抗日戦争記念館見学前後の歴史認識の交流

二つ目は、吉林省の中学生との交流と、宝鶏の小学生との交流である。この二つは私にとって思いがけない交流であった。吉林省の中学生との交流は、プログラムとは関係なく、たまたま故宮博物院視察の際に修学旅行に来ていた中学生の一部が、帰りのバスに向かって歩く我々に、中国語で「韓国人？」と聞いてきたため、「日本人！」と答えると、「Hello！」などと声を掛けてくれたため、「こんにちは、你好^{ニハオ}」と返した。すると、喜んでくれ、握手を求められた。10人ほどの生徒と「谢谢^{シェンシェ}」と言いながら握手を交わし、一緒に写真撮影をした。それだけの交流ではあったが、笑顔と、心を開いて相手を見ろということは、友情のはじまりなのだと感じるとても印象的な出来事であった。



故宮博物院視察の際に出会った吉林省の中学生と

また、東嶺コミュニティと青年の宿場クラブの視察に行った際には小学生と一緒に絵を描く交流をした。私

は、中国語があまり分からなかったが、出発前に中国語で言いたいフレーズを書いておいたスケッチブックを見せながら話したり、英語を交えたりしながら話す中で、とても良い交流を結ぶことができたと感じる。「良い思い出になりました」という内容の中国語を、私がスケッチブックを見せながら言うと、交流した女の子が、「私のことを忘れないでね」という内容の中国語を書いてくれ、とても感動した。

三つ目は、北京第二外国語学院での日中平和友好条約締結40周年記念フォーラムにおいてグループディスカッションのまとめの発表をしたことと、宝鶏工作機械グループ有限公司にて、一帯一路に対する理解と認識の発表をしたことである。日頃から、大学などの授業で質問をすることは多いが、これら二つのように、代表として大勢の前で発表をするという機会は最近少なくなってきたこともあり、少し緊張したが、グループディスカッションのまとめでは、「まとめるのが上手ですね！」と現地の学生たちから褒められ、また宝鶏工作機械グループ有限公司の方からも、「一帯一路についてよく勉強されていますね」と言っていたき、良い発表の機会を得ることができたと感じた。



グループディスカッションの成果発表

以上が私が本事業の中で特に印象に残ったこと、学びになったことである。

3. 本事業を通し成長したこと

本事業を通して自身が成長したと思うこともまた三点ある。

一つ目は参加青年を含め多様な人と交流ができたということである。私は小学校から大学まで一貫校に通っていたこともあり、これまでは、同じような思想・育つ環境を持つ人とばかり関わっていたため、今回の事業のように、18～29歳までの様々なバックグラウンドを持つ青

年らと寝食を共にするような機会を持ったことがなかった。そのため、今回の事業はとても良い経験になったと感じている。また、中国においても、先述したようにたまたま出会った中学生から、各都市の大学生、ボランティアのガイドさん、ホストファミリー、中華全国青年連合会の要人の方々等と共に非常に有意義な交流ができた。しかし、今回は、日本語や英語ができる方や、通訳の方が多くいらっしやったために、このような有意義な交流ができたと感じる。今後は、語学を磨き、自分の力だけでも、友情を広げていけるよう頑張りたい。

二つ目は、国際交流をする上でのプロトコールなど、世界に通用する教養をより深めていきたいと思えたことである。私は今回、派遣団のパーカーのデザインを担当したが、最初、団パーカーのデザインをするにあたり、日本の象徴として桜や太陽を、中国の象徴として五星紅旗の星を使おうとしていた。しかし、国旗を彷彿させるものは避けた方がいいということから現在のデザインにシフトした。また、テーマである「愛×愛」も、最初は順番が逆であったが、国名をアルファベット順にしたときに先の国が左側になるというプロトコールを学び、順番を入れ替えた。また、一帯一路についてのスピーチを作成する際も、中国側にとっても、日本側にとっても、不快にならないような言葉選びを何度も団員の先輩方と共に検討した。このような経験を通し、私は、国際交流というものは、それだけですばらしいものだと思ってきていたが、相手側に立った配慮ができないと、見る・聞く側に不快な思いを与えかねないのだなということを知り、世界的な基準を学ぶことや、世界情勢についても、更に注意して見ていくべきだと感じるようになった。

三点目は、アカデミックな知識をより強固なものにしていきたいと思ったことである。中国で目にした様々なものは、私がこれまで勉強してきたことに関連していると感じた。私は、文学部人間学科で表現文化、社会学、平和・紛争解決学、哲学・倫理学等々、多分野に渡って勉強してきたが、中国の舞台演劇を始めとする文化や科学技術の進歩の速さ、コミュニティ形成、貧困対策などの活動が全て勉強してきたことと関連していることに気が付き、「もっと自分に知識があれば、さらに深い奥底の部分を分かることができるのに」と改めて知欲を高めた。このように、2018年という中国の成長過程の時期に様々な人と交流し、政府が力を入れる様々な施設の視察などをした本事業の経験は、今後の興味・関心の広がりにもつながっていくと感じている。

4. 成果を今後どのようにいかしていきたいか

ここで得た成果をどのようにいかしていきたいかということであるが、これについても三点ある。

一点目に、私は二月からロシア・ウラジオストクにある極東連邦大学に10か月交換留学をするのだが、その留学においても、この事業で得た“心と心の交流”を大切にしていきたいと思った。また、極東連邦大学には、中国の留学生もよく来ると聞いたため、そこでも日中友好のために動いていけたら良いと考えている。

二点目は、卒業論文にいかしていきたいということである。私は、大学一年生のときから、「ロシアから見た北東アジア情勢」に興味があり、ゼミも、平和紛争解決学メジャーのゼミを選んだ。本事業を通しては、中国から見た世界観というものの一部を垣間見ることができたため、ここで得たもの、また、それをもとに今後得ていくものをもとに、卒業論文などにいかしていきたい、と感じた。

三点目は、将来小説にいかしたいということである。私は将来の夢の一つとして、小説家になることを掲げている。今回の事業を通して得た知識、感情を小説にいかし、小説という側面から、人々の中国に対するステレオタイプの変革に貢献できれば良いと考えている。

以上三点が、私が本事業で得たことを今後にいかしていきたいことである。

5. 終わりに

以上述べてきたように、私は、第40回日本・中国青年親善交流事業を通して、歴史観の重要性や、心を開き直接会って交流することの重要性の再認識、知欲の向上をすることができた。本事業はまさに「愛×愛」とテーマに掲げたように、心と心の交流で友情を結び、同じようで違うもの、違うようで同じものを見つけられた事業であったと感じる。そして、これらの成果を得ることができたのも、多くの人々の支えがあったからこそであり、感謝の思いは尽きない。

その感謝の思いを行動で示すためにも、先に述べたように、自身の今後の留学や卒業論文、将来のキャリアに、ここで学んだことをしっかりいかしていく決意である。

日中友好の懸け橋のために

日中間の未来は明るい。この事業を通して、私が感じた印象である。ホームステイや大学交流のプログラムを通じてこのような印象を持つようになった。特に、ホームステイでは、1泊2日という短い間であったが、中国の生活について多くのことを学ぶことができた。例えば、中国では、お風呂の後にお湯を飲むという習慣があったが、日本人にとってはお風呂の後は冷たい飲み物を飲むのが習慣である。これらの日常生活における違いをホームステイにおいて学ぶことができた。ホストファミリーには、多くの観光地に連れて行っていただいた。これらの経験から、中国は、とても大きい国だということを感じることができた。さらに、仏教をととても大事にしている国であるということを感じることができた。



ホームステイの様子

また、訪中期間中、本当に多くの大学生と交流したが、中国の大学生はとても日本に興味を持っているということが分かった。特に、成都や宝鶏では日本人が少ないに関わらず、日本について興味を持っており、日本語を学習している学生も多かった。日本人と関わる機会がない中で、独学で学習を積み重ね、日本語能力試験N1を取得している姿を見習わなければならないと感じた。また、中国の方々が、日本に興味を持っているということを知り、日本人としてとても嬉しかった。しかし、中国の人から日本のアニメや漫画について尋ねられた時に答えられないことも多々あった。そのため、自分自身が日本の文化について学ぶことも怠ってはならないと感じた。

北京第二外国語学院でのディスカッションにおいては、日中双方の違いを知ることができた。私たちの班は、マス・メディアをテーマにディスカッションを行った。このディスカッションにおいて、マス・メディアの報道がどのような役割を果たすべきなのか考えることができた。マス・メディアは、外国事情に対して、政治関係だけでなく、文化・カルチャー等まで報道してもよいのではないかと感じた。その中でも、特に印象に残ったのは、とある中国人学生の言葉である。それは、お互いの政治や経済といったことは多く報道されるのに対し、両国の文化・カルチャーといったものは、どちらの国も全然報道されていないという言葉だった。もっとお互いの文化やカルチャーを知る機会が増えれば、お互いの国に興味を持つ人たちも増えるのではないかと感じた。これらの討論から、世論を形成するマス・メディアの役割等についても考えるきっかけとなった。



北京第二外国語学院でディスカッション班での写真

中国では、多くの施設を視察させていただいた。特に印象に残っているのは、西安の西安国際港務区規画館である。西安が国際貿易港としての役割を果たすということで、多くの投資がされており、中国の国の事業の凄さを感じることができた。巨額の資金を投入し、その分野で成果を出していく中国を感じることができた。また、常に技術が日進月歩していく様子も見学させていただいた。これらのことから、時代に遅れずに、常に時代の最先端を走っていくことの重要性を感じることができた。

私が、この事業を通して考えたことが三点ある。

一点目は交流の大切さである。交流することによ

て、相手国を知るきっかけになると考えたからだ。特にホームステイや北京第二外国語学院においてのディスカッションはたくさんの刺激を受けた。実際に交流することによって、相手の文化や意識について考えることができた。国が違えば文化も違いがあることは確かだ。国に訪れただけでは、分からない文化背景も多い。しかし、実際に人と人とで交流することにより、文化背景に対する理解も深まるのである。今回の訪中の交流活動において多くの文化背景について理解することができた。そのため、実際に交流することが大切だと気付くことができた。

二点目は、言語力である。大学交流の際に日本語学科の学生と交流したため、コミュニケーションは取れていたが、お互い深い話はできなかったように思う。交流に国境はないという話もよく聞く。確かに、交流に国境はない。さらに、笑顔は国境をも超えると考えている。しかし、実際、相手国をより深く知るためには、言語の力は必要であると実感することができた。お互いが理解できる言語を話すことによって、様々な視野から違う価値観等にも触れることができる。また、相手国の深い考えまで知ることができるのである。そのため、そこから得る学びも多いであろう。したがって、この訪中期間中に、より中国について知るためには、語学の面で成長しなければならないと感じた。

三点目は、知識である。中国についての歴史や文化背景を知ることによって、もっと大きな学びにつながったのではないかと考える。中国の常識と日本の常識が違うということもあった。歴史背景について知らなければ、なぜ、どうしても考えられる部分も少なかったという点も事実である。そのため、文化的背景といったことを知って、どのような経緯でその事業につながった等の深い理解につながるのである。そこから、相手国を知ることにつながるということを感じた。

今回の経験を私は、多くの人に伝えていきたいと考えている。私は、4月から教員として子供たちの教育に携わる。いま日本の教育現場においては、グローバル社会となり、目まぐるしく時代が変化していく中で生きる力を育むことが重要視されている。そのため、今回の経験をもとに、子供たちへの国際理解教育を実践していきたいと考えている。その際に、内閣府の国際交流事業における日本への招へい活動において、自国の学校にゲストスピーカーとしてお招きし、海外の人を講師にして海外事情について話していただきたいと考えている。学校教育だけでなく、社会教育にも取り組んでいきたい。生涯学習社会といわれる中で、子供たち以外にも国際理解教育を推進していきたいと考えている。また、国際交流活動に興味を持つ人たちを増やしたいと考えている。日本政府は、訪日観光客数増を掲げて政策を行っており、こ

れからも多くの外国人が日本に来日することは確かである。2020年には東京オリンピック、2025年には大阪万博が開かれ、これからはより世界に開かれた日本となっていくだろう。その中で外国人と積極的に関われる人が増える世の中になってほしいと考えている。外国人観光客を仲間はすれにせず、困っているときには助け合える共生社会になればと考えている。そのため、外国人との交流を増やしていきたい。だから、私は、内閣府の国際交流事業の報告会を行い、内閣府の国際交流事業に興味を持つ人たちを増やしていきたいと考えている。また、私が大学で行っている留学生支援のボランティアに興味を持つ学生も増やしていきたいと考えている。そのために、もっと広報を増やしていきたい。しかし、一番大事なことは、外国人と交流する経験を持つということが大事であると感じる。実際に交流することによって、外国人に対する偏見等も変わってくる。そのために、外国人と日本人が積極的に交流できる場を作ったり支援したりしていきたいと考えている。私が住んでいる市では、国際交流サロンといったものも開かれているが、残念ながら知名度は低いといった現状がある。そのため、積極的に外国人と関わる場を増やしたり、知人をそのような場に連れていったりして、少しでも交流の場を広げたい。さらに、今回つながった日本人団員・中国との友達とのつながりを大事にして、お互いが助け合いながら、少しでも明るい日中友好のために努力していきたい。

中国派遣を通じて学び得たもの

「やらない後悔より、やった後悔を」

派遣前、私はこのことを胸に中国派遣に臨もうと考えていた。失敗を恐れ、何も挑戦せずに後悔するよりも、何か挑戦した方が得るものが大きいと考えているからである。

また、出発前研修で団長にかけられた言葉が、さらに冒頭の言葉を意識することとなった。

「中国側から、沢山ボールが飛んでくる。それを全部しっかりと打ち返すのは難しいし、ボールを放った相手めがけて打ち返す必要はない。」

私は、この言葉によって、ファウルでも良いからバットを振り、ボールを打ち返し、見逃し三振だけは避けようとする姿勢を心がけようと思った。見逃し三振は、何も挑戦しないことと同じで、結果的に何も得ることはできない。それよりは、空振り三振でも良いから、バットを振って悔いのないようにしようと考えた。派遣中は、チャンスを作り出すことにつながるかもしれないことに能動的に参加をしていこうと決めた。

さて、私が中国を訪れたいと思ったのは、中国の深い、ミクロな部分を知りたいと考えたからである。これまで二回、中国を訪れたことがあるが、初めて中国を訪れた時、自分の思っていた中国とは良い意味で全く違っていたことに衝撃を覚えた。それまで、中国に対するイメージといえば、どうしてもマイナスなものに偏っており、ネガティブなイメージしか持つことができていなかった。しかし、実際に訪れたことにより、私の中国に対するイメージは大きく変わった。自分はある中国の一面しか見ていなかったのだということを感じ、「百聞は一見にしかず」ということを身を以て実感したのであった。と同時に、自分の知らない中国をさらに知りたくなり、また訪れたいと考えるようになった。そして、今回、日中平和友好条約40周年という節目の年に中国訪問という機会を得ることができた。

今回の中国派遣は毎日が刺激的であり、濃密な12日間を過ごすことができた。様々な場所を訪れることができ、忘れがたい経験をすることができた。

まず、印象に残ったのはホームステイである。会ってその日にホームステイをするということで不安もあったが、ホストファミリーは優しく迎えてくださった。温かいおもてなしに、それまで抱えていた不安は一気に吹き飛んだ。1泊しかすることができなかったが、餃子作り

や麻雀、伝統的な朝食を楽しみ、中国の人々の生活を体験することができた。ホームステイを通して、中国に住む人の生活スタイルを垣間見ることができ、日本との共通点や差異に気付くことができた。また、ホストファミリーとは、お互いが抱える素朴な疑問を投げかけ合い、考えや意見をシェアすることができ、有意義な時間を過ごすことができたと思う。

第二に、中国は地域などの場所によって見せる「色」が違うということである。今回の派遣では、北京、西安、宝鶏、成都という都市を回ったが、それぞれの地域で気候や食文化が異なり、場所ごとにそれぞれ特徴が見られたということが新鮮であった。今迄、中国を一括りにして考えていたが、広大な土地を持つ中国は、地域によってその場所の特色があるのだということを感じた。

第三に、中国の発展のスピードの速さである。このことを強く感じたのが西安を訪問した時であった。訪問前は、西安は北京などの大都市と比較すると未発達であるというイメージを抱いており、そこへ訪れることは、大都市と地方都市における格差について考える機会になるであろうと考えていた。しかし、実際に訪れてみると、内陸部においても開発が非常に進んでおり、高層ビルが建ち並ぶ近未来的な街並みが広がっていた。派遣の中では、中国におけるIT産業やドローン技術について知る機会もあり、生の現場を見ることができ、非常に近い距離から学ぶことができたが、どの分野においても先進的な取組みがなされており、技術力の高さにも衝撃を受けた。また、「Kr Space」を始めとした起業を支援する施設環境が整えられていたのも印象的であった。団員の中に、「前に中国に行った時の様子と全然違う」と述べていた人がいたが、その言葉は中国における発展の勢いは失速することなく、常に新しいものが生み出されていることを証明しているように思えた。加えて、電子決済が普及し、キャッシュレスが浸透していることも驚いた。実際、街中でも現金を使う人は少なく、多くの人はスマートフォンで簡単に決済を終わらせていた。「出かける時は、もはや財布よりもスマホの方が大事」とある中国人が述べていたが、これは中国のめざましい発展を物語っている一言のように思えてならなかった。常に変わり続けようとする中国の姿を目の当たりにし、中国は日本に比べて「新しいものを作り、社会や生活をよりよくしていく」という意識が強いように感じた。

第四に、現地の大学生との交流である。派遣中、沢山の大学生と交流をする機会を得ることができた。彼ら

に共通しているのは、向上心に溢れているということであった。彼らは将来像をしっかりと考えており、行動力の高さには驚かされるばかりであった。例えば、日本を訪れたことがなく、わずか数年しか日本語を学んでいないという中国人大学生は、日本語でのコミュニケーションがスムーズにとれるほど、語学スキルが高かった。また、大学院に進学して日本に留学したいという目標も既に持っていた。私自身、できる限りのことには挑戦している気でいたが、現状に満足することなく、常に上を目指そうとする中国の大学生の姿に、自分自身が恥ずかしくなった。向上心に満ち溢れた大学生が非常に多く、私も色々と刺激をもらうことができた。

この派遣を通じて、私は多くのことを学び得ることができたと感じる。

まずは、積極的なコミュニケーションをとろうという姿勢の重要性である。派遣中、伝わらないことを恐れ、初めは話すことに奥手になっていたが、自ら動かなければ環境は変わらないということを思い出し、積極的にコミュニケーションをとることを心がけるようになった。そのことで、多様な価値観に触れることができ、自分の固定観念で物事を考えてしまうことのリスクを知り、幅広い視点から物事を捉えることの大切さを知ることができた。しかし、同時にその面では語学力にも課題が見られた。言語スキルが十分でなくても、確かに交流することはできた。しかし、表面的な会話はできても、ディープな話までは進めることができず、何度ももどかし悔しい思いをした。ホームステイの時、ホストファザーに言われた「語学ができなければ、何もできないよ」という言葉は、私の心に刺さった。互いの価値観や倫理観の共有や、思いをぶつけ合うという一歩踏み込んだ会話の段階においては、語学力は不可欠であるということを実感した。語学力の向上においては、自分自身に甘えることなく、努力し続けたいと思う。

次に、挑戦は成長につながるということである。私は、リーダーシップを発揮して率先して人を引っ張っていくということが得意ではない。しかし、今回の派遣では、記録係のリーダーを務めたり、普段なら敬遠してしまいがちなスピーチに挑戦してみたりと、苦手意識を克服し、自分を変えようとするのを念頭にできる限りのことはやってみた。このような自分の中の挑戦は、終わってみればやって良かったと思えるものであり、一つステップを踏むことができたのではないかと感じる。

この派遣を通して、自分の中にある価値観が大きく揺さぶられた。バックグラウンドが全く違う人と出会い、多様な価値観に触れたことで、自分の視野が広げられた。固定概念が打ち破られる経験を何度もし、幅広い視点を知る機会にも恵まれた。

そして何よりも、大切であると感じたのが「歩みより」である。それを感じたのが、自由時間の際に、ドリンクスタンドで飲み物を注文する時のことであった。私は最初、指差しで注文しようと思ったが、ふと思い立ち、中国語で注文してみようと思った。中国語が堪能な日本青年に教えてもらいながら、拙い中国語で注文した。あまりにもひどい中国語で途中から恥ずかしく申し訳ない気持ちになってきたが、店員さんは嫌な顔一つせず、注文し終えるのを待っていてくれた。無事注文し終わると、よく頑張ったと言わんばかりに、さらに笑顔になってくれた。本当に小さなことであったが、忘れられないほど嬉しかった。

この体験を基に、中国人との交流のタイミングでは、自己紹介を中国語で言うという姿勢をとってみた。ほんの少しの中国語であったが、相手の人が喜んでくれるのが嬉しかった。反対に、中国人が一生懸命日本語を話そうとしてくれることも、私にとっては喜ばしいことであった。このように、国という壁を超え、交流する時に大切なのは、「歩みより」なのではないかと感じた。相手の国の言語を話してみるという言葉の面などでの歩みよりは、相手のことを理解しようとしている、相手の国のことを理解しようとしている姿勢を表し、お互いの距離を縮めることにつながる。初めからお互い住んでいる国も、言語も価値観も違うので分かり合えるはずはない、と諦めるのではなく、歩みよりをしてお互いを知ろうとする意識、姿勢を持つことこそが重要なのではないかと感じた。

中国は、不思議な国であった。訪れる都市ごとに、その雰囲気は異なり、様々な「顔」を持っている国であると感じた。また、勢いを失うことなく発展しており、変わり続ける国であるとも感じた。この派遣は、そのような新しい中国の一面を知る大変貴重な機会であった。

私は、今回の中国派遣をゴールとするのではなく、寧ろここからがスタートであると考えている。今後も、何らかの形で中国との交流に関わっていき、日本と中国の友好関係の構築に寄与したいと思う。また、この派遣で学んだことを将来、必ず社会に還元することができるよう、尽力したいと強く思う。

それぞれの一带一路構想

1978年北京にて日中平和友好条約が締結されてから40年が経った。我々第40回日本青年中国派遣団は、記念すべき40周年というタイミングで中国へ訪問することができ、非常に有意義な時間を過ごした。

私が本事業に興味を持ったのは、2013年頃から増加している訪日外国人について調べていたのがきっかけである。なぜここ数年で訪日外国人が急増しているのか、また、なぜ海外へ渡航する日本人が増えているのか、その理由をインターネット等で調べるのは簡単であるが、実際に自分の目で確かめたい、肌で感じたいという気持ちが強くなり、本事業の参加を決意した。

私の職業は税関職員であるが、海外渡航の経験も少なく、業務以外での外国人との交流経験も乏しかったので、中国派遣にあたり不安なこともあったが、事前研修や出発前研修等で日本青年中国派遣団の団員と寝食を共にし、絆を深め、各個人の思いや意気込みを聞いて、非常に前向きな気持ちで本派遣に臨むことができた。

今回の派遣に係る団員は、団長1名、副団長2名、渉外2名、参加青年20名であった。参加青年のうち14名が学生であり、6名が社会人であった。私は学生の頃、集団スポーツの部活動でキャプテンをしており、参加青年の中でも最年長であったことから、事前研修が始まるまではリーダーシップを発揮しようと考えていた。しかし、今回参加した青年は皆、協調性があり、コミュニケーション能力が高く、前向きであったため、参加青年全体を指揮する役割であるユースリーダーには立候補せず、全体を見ながら抜けている部分をフォローしていくことにした。

派遣団の中にはいくつかの係があり、私は日本紹介係を担当した。日本紹介係は、訪問先の都市にて日本文化等を紹介する役割で、同係が中心となり中国派遣までに紹介に係る準備を進め、参加青年全体での演目や、個別の演目を各訪問先で披露した。物品購入等の事前準備や訪問先での調整が必要とのことから、私は同係でリーダーを務めることとなった。

団員は全国から集まっており、年齢、職業、学んでいる分野など全てが異なっており、事前研修から中国派遣までの自主研修期間に、コミュニケーションを取ることは容易ではないと考えていた。しかし、今は直接会えない状況であっても、SNSを利用してテレビ電話等で話することができるため、同係では頻繁に連絡を取り合い、事前準備を円滑に進めることができた。また、世代やバックグラウンドが異なるため、互いが理解できずに戸惑う

場面が出てくるかと思っていたが、本中国派遣団員の協調性とコミュニケーション能力の高さにより、躓くことなく派遣に臨むことができた。

中国への訪問は、12日間の中で北京、西安、宝鶏及び成都の4都市を回り、企業や大学などの施設を訪問した。

北京では、史家胡同博物館、Kr Space、中国人民抗日戦争記念館、北京第二外国語学院、故宫博物院、在中国日本国大使館、中国国際青年交流センターを訪問した。

次に、西安では、秦始皇帝陵博物院、西安国際港務規画館、中西部陸港金融小鎮、西安港中欧班列運営センター、西安鉄路コンテナセンター、西安外国語大学を訪問した。

宝鶏では、宝鶏市渭濱区インターネット産業パーク、東嶺コミュニティと青年の宿場クラブ、宝鶏文理学院、宝鶏工作機械グループ有限公司を訪問し、最後の成都では、成都理工大学、成都ジャイアントパンダ繁殖研究基地を訪問した。

その中で印象に残ったことは、中国人のプレゼンテーション、起業の考え方、スマホ文化である。

まず、プレゼンテーションの手法について中国人は、資料の細かいところの厳密性や完璧さにこだわるより、発表者の伝えたいことをただひたすらに言葉にしているように感じた。また、資料の配色は日本人が作成するものより、派手である印象を受けた。派遣中、各都市の企業や大学でプレゼンテーションを受けたが、どのプレゼンテーションも自信に溢れており、堂々とした振る舞いは、日本人が見習うべき点ではないかと感じた。特に北京のKr Spaceでのプレゼンテーションは、起業に失敗した点や業績が安定するまでの失敗談について、全く恥じることなくむしろ生き生きと発表している姿は、とても強く印象に残った。

続いて起業の考え方であるが、前述のとおり起業に関して、中国人は失敗を恐れることなく前向きに捉えているように感じた。良いアイデアを思いついたので起業してみようという学生や、人の下で働きたくない、上司の言うことを聞きたくないから起業する等、起業理由は様々であったが、土地面積が広く人口の多い中国で多くの起業家が現れると、その中で熾烈な戦いが生まれ、経済が活性化していくため、今後中国は更に発展し世界に進出していくのだろうと感じた。

また、今回の中国派遣は内陸部を訪問したので、内陸部ならではの起業の仕方、農村部を絡めた起業の仕方について学ぶことができた。これまで中国国内の発展途

上地域では、農畜産物は杜撰な管理で、品質に関しても信用性の低いものもあったが、それを打開すべくコンピュータソフトウェアの開発に取り組み、農畜産物とソフトウェアを組み合わせたイノベーションや、農家の高齢者と共に創り上げていく起業方法も知ることができ、非常に勉強になった。

本事業で一番印象に残ったスマホ文化については、今や中国では、スマートフォンが無ければ日常生活に支障をきたすと言えるほど、スマートフォンが必要不可欠なものとなっている。派遣前から日本でも新聞やニュースで取り上げられているALIPAYやWechat PAY等の中国のモバイル決済サービスの普及が非常に進んでおり、訪問先の店舗によってはモバイル決済サービスでしか支払えない店舗も存在し、本派遣中に商品の購入を断念したこともあった。また、マスメディアの利用についても日本とは違い、ほとんどがスマートフォンによる情報収集である。北京第二外国语学院にて、マスメディアについて同学院の学生とグループディスカッションをおこなったが、新聞やテレビを見る学生は少なく、映像や動画はパソコンで見て、新聞記事はスマートフォンで見るという中国大学生がほとんどであった。

本事業を通して成長したと感ずることは、日本以外若しくは日本人以外の考え方を知ること、自分の視野を広げることができたということが一番である。私がこの事業に参加する以前は、仕事をしていく中で、あるいは物事を考える中で、無意識のうちに日本的発想で進んでいた。それはごく自然なことで、自分が日本で生まれて日本で育ったからであるのと、周囲に海外経験が豊富な人がいないからである。しかし、グローバル化が進んでいるこの世の中で、限定的な発想をしているようでは社会の発展は難しく、これからの時代に取り残されてしまうと考える。私はこの国際交流事業を経験したことによって、20代という若さで自分の視野を広げることができ、現在の仕事にも今後のキャリアアップのためにも非常に重要な感覚が身に付いたのではないかと感じた。

コミュニケーションに関しては、日本と中国で政治や文化は違えど、数十分や数時間だけでも顔を合わせて言葉を交わすことで互いのことを少しでも理解し、良好な関係が築けることを肌で感じた。西安では、人生初のホームステイで中国人の一般家庭の生活を体験することができた。ホストファミリーの夫婦は全く日本語が話せず、身振り手振りでのコミュニケーションとなったが、プレゼントとしてホストファミリーに渡したお土産のおもちゃで遊んだり、互いの趣味の話などで非常に盛り上がった。また、各都市で多くの大学生と交流したが、どの大学生も親しみやすく気軽に話してくれる人ばかりであった。日本に興味を持ち、日本語や日本文化を学び、とても日本を理解してくれている。中には我々より日本

の歴史や文化に詳しく、熱心に勉強している学生もあり、その姿勢に心を打たれた。日本では身近に中国の現状等を詳しく知る機会が少なく、中国の良い部分が見えづらいと感じることが多い。だが、実際に中国へ訪問し、中国人の考え方や表現方法、文化の違いを学ぶことができ、中国人の良さを知ることができた。

自分自身で感じたり、得たものを吸収するだけでなく、交流した各都市のたくさんの中国人と連絡先を交換したことにより、中国派遣が終わった後も日本と中国の国境を越えたつながりを持つことができた。このつながりは非常に重要なことであり、国際社会において必要不可欠なものである。これを活用して次世代のリーダーとして国際社会で活躍し、社会貢献活動等につなげていきたい。

おそらく、海外に少しは興味があるものの、時間的制約等の理由から海外に行けず、本事業参加前の私と同じ様な感覚の人もあるはずである。しかし、本事業に参加するというちょっとした行動に出ることにより、視野及び人脈が広がり、自分に自信がつき、業務の幅が広がり、キャリアアップにつながる一歩になると私は考える。

私が日本でできることは、この非常に有意義な体験を少しでも多くの日本人に知ってもらう環境を作り、本派遣で出会った中国人とも深く長く関係を築いていきたい。

プログラムの概要

日 時	2018年10月25日
場 所	北京第二外国語学院（北京市）
プログラム名	日中平和友好条約締結40周年記念フォーラム－日中青年友好フォーラム
テ ー マ	未来に向かう日中関係とその責任 ①日本人と中国人 ②スポーツ ③文化教育 ④経済 ⑤環境保全 ⑥マスメディア

分 科 会 ①	日本人と中国人												
参 加 者	日本青年3名、中国青年4名												
成 果	【両国の生活様式の比較】 <table><tr><td></td><td>日本</td><td>中国</td></tr><tr><td>衣</td><td>着物／浴衣</td><td>チャイナドレス</td></tr><tr><td>食</td><td>あっさり、さっぱり</td><td>こってり、こくがある</td></tr><tr><td>住</td><td>学生は実家暮らしか、ひとり暮らし</td><td>学生は基本的に寮</td></tr></table> ＜日本側からの質問と中国側からの回答＞ Q 日本側：「日本の学生は実家暮らしや一人暮らしが多いが、中国の学生はどのような生活をしているのか。」 A 中国側：「中国の学生は大学の敷地内にある寮で生活することが一般的だ。」 ＜中国側からの質問と日本側からの質問＞ Q 中国側：「中国では日本の文化に触れる機会が多いが、日本はどうか。」 A 日本側：「日本にはそういう機会がありません。中国のメディア・コンテンツをもっと見たい。法律的なものや外交関係だけではなく、文化理解や民間の交流が重要だと思う。差別は、交流でしかなくなるはずだ。」 【まとめ】 日中関係を担うのは、法律ではなく民間の交流だと考える。人的交流が大切であるという点について、このディスカッションを通じて日本の青年と中国の青年が感じていることが同じであることが分かった。		日本	中国	衣	着物／浴衣	チャイナドレス	食	あっさり、さっぱり	こってり、こくがある	住	学生は実家暮らしか、ひとり暮らし	学生は基本的に寮
	日本	中国											
衣	着物／浴衣	チャイナドレス											
食	あっさり、さっぱり	こってり、こくがある											
住	学生は実家暮らしか、ひとり暮らし	学生は基本的に寮											

日本人と中国人グループ感想

中国青年4名、日本青年3名で「日本人と中国人」をテーマにディスカッションを行った。初めに日中の衣食住について話し合い、相違点や共通点を挙げた。中国青年は日本の文化についてたくさんの質問を投げかけてくれた。中国青年の日本のことをもっと知りたい、交流したいという熱い気持ちが伝わってきた。また、日本側の青年も積極的に意見を発言することができ、短い時間であったが有意義な意見交換ができたと思う。衣食住のテーマの後には日中友好のためには何が必要かについて話し合った。「今不足しているのは法律的なものではなく民間的、人的なものである」「本事業のような交流が大切」「人と人との交流なので国籍や性別などはない」といった意見が出た。共通しているのは、人的交流が大切であるという点であった。このディスカッションを通じて日本の青年と中国の青年が互いに感じていることが同じであることが分かった。この共通認識を確認できたことが何よりも嬉しく、日中友好の第一歩だと感じた。これは実際に中国に行って中国の青年と交流してみないと分からない感覚であり、それと同時に私たち日本青年の思っていること、考えていることを伝えられたことは非常に有益だったと思う。一人一人が周りに広めていくことがとても大切だ、とみんなで確認し合った。これからの日中関係の未来を築いていくのは私たち青年であり、それが私たちの責任でもある。お互いの国のことをよく知り、そしてその国でたくさんの友達を作るとさらにその国に愛着が湧くようになると思う。ディスカッションが終わった後に学校案内をしていただいた。さらに親しく話すことができ、「あなたと出会えて友達になれて良かった。ありがとう。」と言葉をかけていただいた。心と心がつながれば国籍は関係ないと実感できた瞬間であり、これこそが国際交流の醍醐味であると実感した。このつながりを大切にしてこれからも交流を続けていきながら多くの人にこの時感じた感覚を伝えていけたらと感じている。



分 科 会 ②	スポーツ
参 加 者	日本青年3名、中国青年3名
成 果	＜日本側からの質問と中国側からの回答＞ Q 日本側：「スポーツ選手を通じて日本に興味を持つことはあるか。」 A 中国側：「私自身は、日本人選手に興味を持ったことをきっかけに日本を好きになった。十分にあり得ると思う。」 ＜中国側からの質問と日本側からの回答＞ Q 中国側：「日本と中国の両方で人気のスポーツは何かあるか。」 A 日本側：「空手は日本でも人気がある。空手をきっかけに相互理解を深めることができれば良いと思う。」 【まとめ】 日本は2020年に東京オリンピックを、また中国も2022年に北京冬季オリンピックを控えている。そこで、日中の青年がオリンピックのボランティアを行うことで日中友好に貢献できると考えた。また、それぞれのオリンピックではたくさんの日本人や中国人が海を渡り、観戦に行くと考えられることから、オリンピックの支援ボランティアに参加することによって、観光客との交流や支援が行えれば相互感情も改善するだろう。 さらに、日本青年からは「空手など両国で人気のあるオリンピック競技をテレビや雑誌で紹介し、認知度を高めたい」という意見が、中国青年からは「訪日した際に、一般家庭から出る使用しなくなった貴金属からメダルが作られることを知り、中国にも広めたいと思った」という意見がそれぞれ出た。加えて日中両国の青年から、「人気のある選手がメディアに出ることが両国の理解を深めるきっかけになるのではないか」という意見と、それに関する多数の賛同があった。 このディスカッションを通して、日中両国の青年がスポーツに対して高い興味と関心を持っている事がわかった。上述のようなスポーツを通じた交流が、日中関係の前進につながることを期待したい。



スポーツグループ感想

スポーツを通して日中友好関係を築くためには何ができるのかというテーマでディスカッションを行った。私たちの班では、四つの意見が出た。

一つ目は、自分たち学生ができることを考えた。それは、オリンピックのボランティアを行うことだ。オリンピックでは、たくさんの中国人の方たちが日本にオリンピックを見に来ることが予想できるからである。ボランティアに参加することによって、交流もできると思った。

二つ目は、新しい競技を紹介することだ。新しい競技は、野球・ソフトボール、空手、スケートボード、スポーツクライミング、サーフィンで、中でも空手は、両国で人気がある競技であるため、テレビや雑誌で紹介をして、認知度を高めたいと思った。

三つ目は、メダルについてである。8月に訪日した中国の学生がいた。その学生は、訪日した際に、一般家庭から出た使用しなくなった貴金属からメダルが作られることを知り、中国にも広めたいと言っていた。

四つ目は、人気のある選手がメディアに出ることで両国の理解を深めてもらうことである。実際に、スポーツ選手を好きになったことがきっかけで日本のことが好きになった学生もいた。

私たちの班では、短い時間の中で四つの意見をまとめることができた。このディスカッションを通して、日本も中国もオリンピックに近いこともあり、スポーツに対して意識が高いことが分かった。スポーツは、「言葉を交わさずにコミュニケーションをとることができる一つの交流の方法」であり、交流を行うハードルが低く、日本と中国の友好関係を築くために重要になってくると考えたからだ。スポーツを通して日本と中国の相互理解がより深まることを願っている。

ディスカッションをしている際、中国人学生は、東京オリンピックのボランティアに参加したいと思っていることを知り、嬉しかった。中国人学生は日本人学生と比べてとてもボランティア活動に対する意識が高かったように感じられた。それは日本人学生として見習わなければいけないと思う。

また、年の近い中国人学生と交流をすることで、貴重な意見交換をすることができた。そして、日本・中国で人気なオリンピック競技について、さらには中国で人気のある日本人選手のことについて話し合った。加えて、両国の学校で行われる体育の授業や部活動の意見交換をした。その結果、日本と中国の違いを知ることもでき、有益だった。



分 科 会 ③	文化教育
参 加 者	日本青年4名、中国青年4名
成 果	【両国の現状】 ＜中国＞ ・ 漢詩、演劇などさまざまな伝統文化が日本と似ている ・ 日本に関する教育には、ネガティブなものもある ・ 中国の若者は日本文化に対して高い興味関心を持っている ・ 日本に対して好意的な若者が多い ＜日本＞ ・ 落語、歌舞伎、浄瑠璃など、さまざまな伝統文化が中国と似ている ・ 中国に対する理解が足りない ・ 日本では中国の文化や生活を知る機会がほとんどない 【意見交換の内容】 日本側：「日本と中国は文化がとても似ているため、感覚が近いのかもしれない。」 中国側：「日中は似ていると思うが、それを認識している人は少ないと思う。日本人と中国人を別の枠組みとして考えるのではなく、理解し合える同士として認識できれば良いのではないか。」 中国側：「互いにもっと文化や歴史などを学べると良いと思う。」 日本側：「日本では中国文化に触れる機会が少ないため、教育の現場などでそのような機会を増やせば良いと思った。」 【まとめ】 日本と中国の間には悲しい歴史や、様々な問題があるが、その歴史や互いの問題を真摯に学び、向き合っていく必要があるだろう。そして、近い文化を持つ日中だからこそ、その文化に触れ合い、相互理解につなげていきたい。



文化教育グループ感想

私たちは、「文化教育を通して日中友好関係をどうつなげていくか」というテーマでディスカッションをした。初めに青年たちは文化教育をテーマに選んだ理由を話し合い、次に文化教育の面で日中友好関係をどうつなげていくか話し合った。

私は、日本文化と中国文化にどのような共通点があるのか関心を持ち、このテーマを選択した。団員の野村は、大学で文学を専攻していることから、文化による日中交流について中国青年がどのように考えているのか興味があったという。中国青年たちは、日本のポップカルチャーや漢詩を通じて日本文化を知り、参加したそうだ。

次に、なぜ文化教育が必要なのかについて話し合った。その結果、交流の際に、政治や経済より障壁が少なく、気軽に純粋に交流を楽しめるのではないかと考えた。また、教育を通して小学校の頃から日本や中国の文化について学ぶ機会を増やすなど小さい頃から教育の場で異国の文化を教えることで異文化理解を促進できると考えた。他にも、大学などでは留学など実際に海外に行く機会を増やすことで異文化理解を深めることかできる。

また、積極的に自分の文化を発信し交流の場を増やすことも大切だ。文化と言っても、歌舞伎、書道などの伝統文化から現在の日本が分かるポップカルチャーまで幅広くある。その中で、自分が魅力的だと思う日本文化を積極的に発信し、様々な人々に興味を持ってもらい、日本文化を広めたいという意見がでた。文化という手段による両国の交流は、政治面、経済面での影響を受けにくく、両国の関係維持に適切な手段であるという意見がでた。

さらには、その文化を教育という手段によって伝えていくことが、両国の将来を担う若者の友好促進に役立つという結論に至った。

今回、中国青年たちと意見交換する中で、李白の「^{ちょうけいこう}晁卿衡を哭す^{こく}」という漢詩の話がでた。友人の阿倍仲麻呂の船が遭難して亡くなったと伝えられた時に追悼の意味を込めて李白が作った詩である。仲麻呂と李白は、詩という両国に伝わる文化を通して友好関係を築き上げてきた。私たちも、そのような文化交流を目指し、日中友好の架け橋になりたいと考える。



分 科 会 ④	経済
参 加 者	日本青年3名、中国青年3名
成 果	【両国の現状】 ＜中国＞ ・「世界の工場」となった ・IT産業において極めて進んでいる ・アメリカと相互に経済制裁をしている ・貧富の差がある ・中国のGDPは世界2位 ・建設は中国が強く、環境保全は日本が強い ＜日本＞ ・国内生産が徐々に減少し、国外に生産拠点が移っている ・国の借金が多い ・（生産拠点の移転に伴う）日本産業の空洞化 ・日本のGDPは世界3位 【意見交換の内容】 日本側：「中国が行っている一帯一路計画を通じて経済連携ができるのではないか。」 中国側：「日中が協力することで一層の相乗効果があるだろう。」 中国側：「建設は中国が強く、環境保全は日本が強いといわれている。お互いにそれぞれの領域で力になれるのではないか。」 日本側：「両国が得意な領域で力を出し合うことで、日中関係が前進すれば良いと思った。」 【まとめ】 日本の現状として、高齢化に伴い労働人口が低下し、さらに国内消費も落ち込みを見せていることから、デフレーションが長く続いていることが挙げられる。また、中国の現状としては、米中の貿易戦争によって景気が冷え込むと予測され、さらに改革開放以降、貧富の差が拡大し続けている。そこで、今後は中国の進める「一帯一路」において、日中両国の強みをいかしながら、新たな経済市場を開拓していきたい、そして、日中が中核となってアジアの発展に寄与していきたい。



経済グループ感想

私は今なお勢いを緩めることなく成長を続ける中国に関してその原動力とは何なのか、若者たちが自分たちの国をどのように見ているのかを知りたいと思い、この事業に参加した。そのような中で、「経済」という観点から意見交換をすることのできたこの機会は、私にとって非常に有意義な時間となった。

話し合いを行うにあたり、まず互いの国の現状について述べた。そこで気になったこととして、毎年経済発展を遂げている中国にあっても、若者たちは将来に不安を抱えているということである。私はてっきり中国の未来は明るいということを前面に押し出してくると予想していたのだが、意外にも賃金や就職、貧富の差等に対し危機感を持っており、政府が何らかの対策をすべきだと強く主張していた。同様のことは日本でも起こっており、日本と中国は経済において似たような問題を抱えていることを知った。

次に日本と中国に関する今後の展望について話し合った。中国側の意見としては、成長を続ける中国にあっても、いずれ限界が来る、そのような事態を乗り越えるためには日本と中国両国の経済連携が必要であるとのことだった。中国も日本との協力の必要性を認識しており、それは日本側の意見としても同様であった。建設事業を世界規模で展開している中国にとって、環境に与える影響を最小限にとどめるため、日本の経験や技術を用いたいとのことで、そのことは日本にとっても大きなビジネスチャンスになると感じ、日本経済の行き詰まりを突破するためにも、今後中国との関係を密にしなければならないことを思った。

このディスカッションを通して、未来を担う若者たちが日中協力して発展していきたいという考えを有していることを知り、将来に対する期待感を覚えた。互いの国に対する信頼感がなくなりつつある近年において、このような話し合いの場を設け、それぞれの国の立場から意見を言い合うことは互いのことを知るきっかけとなり、建設的な日中関係を構築するために必要であると感じた。



分 科 会 ⑤	環境保全
参 加 者	日本青年3名、中国青年4名
成 果	【両国の現状】 ＜中国＞ ・ スモッグやマイクロプラスチックの問題 ・ ポイ捨てや痰吐きによる街の汚染 ・ シェアバイクや電動バイク、公共のゴミ箱が一般化 ＜日本＞ ・ 街にゴミ箱が少ない ・ ゴミの分別が細かい ・ 分煙が進んでいる ・ 太陽光発電の利用が進んでいる ・ 過剰包装の問題 【意見交換の内容】 ＜日本側からの質問と中国側からの回答＞ 日本側：「環境汚染の影響はゆっくりと現れてくるため、危機感が芽生えにくいですが、どうするべきだと考えるか。」 中国側：「環境汚染に対する危機感は教育で醸成していくしかないと思う。」 ＜中国側からの意見と日本側からの回答＞ 中国側：「過剰包装はやめるべきではないか。」 日本側：「その通りだと思う。スーパーではエコバッグの使用が浸透しているが、通販や百貨店はまだ包装の簡素化が実現できていない。」 【まとめ】 中国では「燃えるゴミ」、「燃えないゴミ」、「生ゴミ」の三つに分別するのが一般的だが、リサイクルを前提とした分別が必要だろう。さらに、ポイ捨てなど日中共通の問題は、教育などを通じて少しずつ減らしていく必要がある。 すなわち、日中両国が意識改革によって環境保全への関心を高め、個人レベルで危機感を持つことが重要である。そして、日中が共に知恵を出し合いながら、環境問題の解決に向けてイニシアティブをとっていくべきだろう。



環境保全グループ感想

中国における大気汚染やPM2.5などの問題を派遣前から耳にしていたため、実際の中国の状況がどのようなものかを学ぶために環境の分科会に参加した。

今回の環境の話し合いの中では、中国の公共の場にゴミ箱や喫煙所があることが日本人として驚いたことから話を始めた。近年、日本、特に東京では街中のゴミ箱が減少している。理由としては、景観の保全、オリンピックに向けてのテロ対策などとされているが、中国では公共のゴミ箱のゴミ袋を替える仕事をしている方もいることを考えると、色々な見方があると思った。

また、日本では喫煙所も各地に設置されているが、中国では灰皿が道に設置されていることなど、両国での対比を感じた。

シェアバイクや電動自転車の利用が中国で進んでいることも話し合いの中で出てきた。日本でも都内でシェアバイクはあるが、中国のようにQRコードを読み込ませることでレンタルできるシステムはまだ普及していない。中国の大気汚染問題に取り組む姿の表れだと思う。

日本では東日本大震災による原子力発電所の事故を受け、放射性廃棄物を処理する場所の問題から、太陽光発電が新しい資源として利用されていることを紹介した。その上で、台風が多い日本では、太陽光パネルが飛ばされてしまい、被害を増やす可能性があることを共有した。

リサイクルの点では、日本のある靴店では靴を購入する際に不要な靴を持参すると下取りをしてもらうことができたり、スーパーマーケットによってはレジ袋を辞退すると特典があったりすることなどを共有した。

この話し合いの結論としては二つのことがまとまった。一つ目は、日本と中国共に、若者にゴミの分別が広く認識されてない理由として、教育課程の中で教えてもらえないことが原因であると考えられ、学校の授業の中で教えることで意識改革を進めることが大事だということである。二つ目は、日本と中国でお互いに進んでいる技術や取り組みをシェアして、積極的に両国に促していく必要があるということである。これらの結論から私たちが若者としてできることはどのようなことかを考え、自国に貢献していかなければならない。



分科会⑥	マスメディア
参加者	日本青年3名、中国青年3名
成果	【両国の現状】 ＜中国＞ ・日本についてはポジティブな報道が多い ・中国のメディア・コンテンツはあまり輸出されていない ・中国芸能はあまり有名ではない ・中国の文化が分かるテレビ・ドラマが多数ある ・中国のマスメディア：人民日報、新華社、人民網、CRI、CCTV、中国網 ・日本の文化・ドラマに興味を持つ若者が多い ・報道への信頼度86% ＜日本＞ ・中国に関するネガティブな報道がある ・四川地震のときは応援する報道が多かった ・中国人の「爆買い」が話題 ・オリンピックに関連した訪日客報道 ・民泊に絡めた中国人の報道 ・シャンシャン（パンダの赤ちゃん）報道が活発だった 【意見交換の内容】 ・中国のメディア・コンテンツをもっと日本に普及させる ・中国のSNSには日本の文化・観光・お祭りを発信するアカウントがある ・日本にも、中国を紹介するアカウントや番組があると良い 【まとめ】 日本の中国に対するネガティブな印象は、中国のポジティブな文化をあまり知る機会がないことに原因がある。そのため、マスメディアを通じてもっと日中のポジティブな情報を知れるようになれば、関係がより良くなるはずだ。



マスメディアグループ感想

北京第二外国語学院にて、自国のマスメディアをテーマに、中国人大学生とディスカッションを行った。近年、中国はネットメディアが急速に発展したため、新聞やテレビで情報を得ることは少なく、スマートフォンやパソコンを利用して情報を収集している者が多い。また、生活の中心にはスマートフォンがあるということだった。テレビを娯楽として視聴している学生はほとんどおらず、大変興味深いと感じた。そのためか、テレビ番組では、自国の文化に関するものが多く、年配をターゲットとしているようだった。日本では、中国と同様にスマートフォンやパソコンでの情報収集が多いものの、新聞やテレビもまだ需要はある。日本は、芸能やコメディ関連のバラエティ番組やワイドショーが多い。中国のようにスマートフォンは浸透しているものの、やはり日常の中にはテレビ視聴の時間があり、娯楽として消費されていることが伺えた。

また、自国のメディアへの信頼度は、日本より中国の方が高く、日本は約70%であり、中国は85%を超えている。さらに、相手国に関する情報については、中国では、若者が日本のアニメやドラマに興味を持っていることもあり、日本に関する記事や話題が多く、印象もポジティブなものが多い。一方日本では、訪日中国人の爆買いや上野動物園のパンダの赤ちゃんなど中国と日本に関連する記事がほとんどであり、中国そのものを知る情報は少なく、ネガティブな印象のものも多い。

以上のことから、中国は日本に対して興味や関心があり、情報に触れる機会が多いものの、日本では自発的に中国を調べようと思わない限り、中国の情報を見聞きする機会が少ない。世界中にネットメディアが発展してきているため、自国以外の情報も収集することが可能であるが、日本の現状はまだ一般的であるとは言い難い。日本で中国のメディア、コンテンツをもっと普及させ、広報活動を活発にしていくことにより、日中関係の向上及び改善が期待できると考える。



日 時	2018年11月1日
場 所	成都理工大学（四川省成都市）
プログラム名	アジア文化と青年フォーラム
参 加 者	日本青年20名、中国青年15名
スケジュール	9:20 四川省の歴史に関する動画視聴 9:30 「川劇の魅力と教え」：（無形文化遺産、国家一級演者、教授） 10:10 質疑応答 10:15 「古籍の修復について」（四川西部文献修復センター） 修復の工程を説明、実演 10:55 「伝統工芸を今に繋げる」（日本青年中国派遣団団員） 11:05 質疑 応答 11:10 終了
内 容	【中国側発表】 1. 四川省の歴史に関する動画視聴 ・ ジャイアントパンダと広大な自然が魅力 ・ 「天府の国」と呼ばれる ・ 世界初の紙幣「交子」が生まれた地 ・ 鄧小平の故郷 ・ 李白も深く関わりがある 2. 「川劇の魅力と教え」：（無形文化遺産、国家一級演者、教授） ・ 川劇は文学的なセリフがある ・ 音楽は五つの要素を持つ ・ 京劇に似ているが、相違点もある ・ 役柄は主に五つ、「生」若い男性、「旦」女性、「浄」敵役の男性、「末」老齢男性（ヒゲがある）、「丑」道化 ・ 扇子を用いて、大げさに演じる ・ 四功五法という基礎概念がある <質疑応答> Q 日本青年：「日本や西洋の劇では男性しか舞台に上がれないことがしばしばあるが、川劇はどうなのか。」 A 肖徳美教授：「確かに1950年以前は女性の演者がいなかったが、それ以降は女性の演者も出てきている。」 3. 「古籍の修復について」：（四川西部文献修復センター）修復の工程を説明、実演 【日本側発表】 「伝統工芸を今に繋げる」： ・ 伝統工芸を届ける起業「和える」 ・ 伝統工芸を用いた新作を提案している企業 ・ 宿泊施設の総合プロデュースも行っている

＜質疑応答＞

Q 中国青年：「値段が高いが売れるのか。」

A 日本青年：「需要を見極めた新作を作っている。」

Q 中国青年：「日中の若者が協力して伝統工芸品をもっと広められたら良いと思った。」

A 日本青年：「中国にも伝統工芸を十分に取り入れた宿泊施設があれば素敵だと思う。」

【まとめ】

これまで四川を訪れた経験がなく、自身の四川の魅力や強みに関する理解は決して十分なものではなかったが、このフォーラムに参加したことで十分に理解を深めることができた。歴史教科書で学んだ世界初の紙幣「交子」誕生の地としてだけでなく、愛らしいパンダや美しく奥深い川劇、繊細かつ高度な古籍修復技術など、さまざまな魅力や強みに触れることができたことは、自身の中国理解の一助にもなった。また中国派遣団ではこれまで、北京や西安などで中国の経済発展や技術など、最先端のものを学ぶ機会が多かったため、中国の深く長い歴史に触れることができたことは、大変嬉しかった。

日 時	2018年10月30日
場 所	宝鶏工作機械グループ有限公司
プログラム名	「一带一路」構想座談会
参 加 者	日本青年20名、中国青年15名
スケジュール	15:55 「シルクロード経済帯と海上シルクロード」講義 16:10 宝鶏工作機械グループ有限公司の企業説明 16:30 中国青年プレゼンテーション(2名) 17:00 日本青年プレゼンテーション(2名) 17:10 総評 17:20 終了
内 容	【中国側発表】 1. 「シルクロード経済帯と海上シルクロード」: ・約百か国の各組織と署名を交わし、APECでも認められている ・国家の発展を目指し、自信を持ち活力に満ち溢れている ・宝鶏は一带一路の重要拠点である 2. 「宝鶏工作機械グループの企業説明」: ・宝鶏工作機械グループ有限公司は中・高性能のCNC工作機械を製造・販売しており、年間販売台数7,000台、年商30億元、輸出に伴う外貨獲得額は年間2,200万ドルである ・90年代より、従業員が日本企業において訓練を受けるなど、日本とは以前から深く関わってきた ・アメリカ、ロシア、トルコ、ベトナムで開催された展示会へも出展をし、海外販路の拡大を目指している 3. 宝鶏工作機械グループ有限公司従業員による発表 ① ・ミャンマーでプログラミングやエンジニアリングの教育を施し、それらの技能を備えた作業員を輩出した ・一带一路に接する国々の人の役に立ちながら、上手に関わっていききたい ・宝鶏工作機械グループは海外進出が進んでいる ② ・バングラデシュでアフターサービスをした経験があり、心に残っている ・バングラデシュは一带一路において重要であるとともに、成長が見込まれる国である ・made in chinaのすごさを伝えることができた ・他の中国企業製品を、12時間かけて無料で直してあげたら、とても感謝された ・モンゴルの専門学校へ訪れ、技術指導を行った 【日本側発表】 一带一路に関する見識と理解について、日本青年2名より発表した。 ① ・一带一路は多くの困難がありながらも目に見える成果を出していると考えてる ・中国は、一带一路に関連してインフラ整備の支援も行っている ・中国の大量生産の技術と、日本の細かなニーズに応える力で協力し合えば良いと思う

②

- ・サハリン経由で、日本と中国を陸続きにする計画があると聞いた
- ・日中も協力し、経済関係を促進させたい

＜李清耀代表によるコメント＞

- ・日本人青年の「一带一路」に関する深い理解に感銘を受けた
- ・「中国の大量生産の技術と、日本の細かなニーズに応える力で協力し合えば良いと思う」というのはまさにその通りで、日中が協力すればアジアの経済はより良いものになると思う

【まとめ】

工場を見学して分かったのは、宝鶏工作機械グループが国内のニーズのみならずグローバルなニーズをも満たそうと日々努力している、ということだった。中国という莫大な人口を抱える経済大国にありながら、グローバル規模の視野で製品開発を行う姿勢は極めてエネルギーギッシュであり、すばらしいと感じた。

また、日中の交流の際に李代表がおっしゃっていた、「昔は我々の工場からも中国人技術者を日本へ留学させたり、研修に行かせたりして技術を吸収してきた。そして、今我々は東南アジアの国々へ渡り技術教育も行っている。」という言葉は印象的であった。これほどまでに先進的な技術を持つ企業が、かつては日本から学んでいたという事実は、日本人として大変誇らしく感じられたからだ。ただし、現在の日本企業には、中国から学ぶべきことも多くある。日本青年の発表で「中国の大量生産の技術と、日本の細かなニーズに応える力で協力しあえば良いと思う」意見も出たが、その言葉のように日本と中国が協力し合い、高め合いながら、技術革新に挑んでいければ良いのではないかと感じた。

